

史跡大岩山古墳群

富波古墳調査整備報告書

— 野洲市富波字亀塚所在 —

2008. 1

野洲市教育委員会



富波古墳全景（南東から：昭和57年発掘調査時）



富波古墳整備後全景（南東から）

序 文

昭和16年12月13日に史跡指定を受けた円山古墳と甲山古墳は、その後昭和60年2月7日に天王山古墳、富波古墳、古富波山古墳、亀塚古墳、大塚山古墳、宮山2号墳の計6基の古墳が追加指定され、指定名称も「大岩山古墳群」と変更されました。

このうち富波古墳は、野洲川北岸の扇状地縁辺に位置する水田地帯の一角に位置しています。周囲には古富波山古墳や亀塚古墳が近在し、史跡大岩山古墳群のうち「富波エリア」とも称される一群を形成しています。

当該地を含め周囲一帯は長らくの間水田となっていたために、昭和57年に実施された発掘調査で初めてその存在が明らかとなりました。墳丘はすでに削平を受けていましたが、周囲に濠がめぐる前方後方形の墳墓であることが判明しました。濠内からは近江地域の特色をもつ甕や、東海地域に特徴的な丹塗りの壺片も出土しています。

調査終了後は盛土によって遺構の保存をはかってきましたが、このたび保存整備工事が完了の運びとなりました。整備では削平されていた墳丘と周濠の復元を行う一方、周囲には学習広場や案内板・解説板、休憩施設や植栽等を設けました。

今回終了した富波古墳の保存整備によって、史跡大岩山古墳群8基中6基の古墳の保存整備を終えることとなりました。これら整備された古墳が多くの皆様に学習や調査・研究の場として役立ち、また憩いの場として活用されることを願う次第であります。

最後に、事業の推進にあたり、地元富波甲自治会をはじめとします関係各位の方々、調査および史跡保存整備にあたり多くのご尽力・ご助言を賜った文化庁、滋賀県教育委員会、史跡大岩山古墳群調査整備委員会委員の皆さまに深く感謝の意を表します。

平成20年1月

野洲市教育委員会

教育長 大堀 義治

例 言 ・ 凡 例

- 1 本書は、滋賀県野洲市富波字亀塚に所在する史跡大岩山古墳群富波古墳の保存整備事業とそれに先立つ調査の報告書である。ただし、昭和57年に実施された本発掘調査の成果ならびに詳細については当該年度に刊行された報告書に譲るのでそちらを参照されたい。
- 2 事業は、野洲市が国庫（国宝重要文化財等保存整備費補助金／記念物保存修理）より補助金の交付を受けて実施した。
- 3 保存整備工事は、平成17年度に（株）野洲サルベージが、平成18年度に（有）梁川組が施工し、実施設計ならびに監理は（株）空間文化開発機構に委託した。
- 4 本書に使用した位置図は、野洲市発行の2500分の1都市計画図を使用した。本文中の方位は座標北を示し、寸法単位はm、cm、mmで表示した。
- 5 本書の作成は、史跡大岩山古墳群調査整備委員会の指導・助言を得て、角 建一が執筆した。保存整備報告に使用した図面は設計図書より転載した。
- 6 平成17年2月に実施した現地調査は角が担当した。保存整備工事は平成17・18年度ともに杉本、角が担当した。この他報告書の作成にあたり、前田博美の協力を得た。
- 7 調査と整備は、文化庁記念物課、滋賀県教育委員会文化財保護課、史跡大岩山古墳群調査整備委員会の指導・助言のもと野洲市教育委員会文化財保護課が主体となって実施した。なお、史跡大岩山古墳群調査整備委員会および野洲市教育委員会の事業体制は以下のとおりである。

【史跡大岩山古墳群調査整備委員会】

（肩書きは当時のまま。なお、調査整備委員会にはオブザーバーとして滋賀県教育委員会文化財保護課記念物担当者の出席を得た。）

第8期（平成15年4月1日～平成17年3月31日）

- ・ 林 博通（滋賀県立大学人間文化学部助教授）
- ・ 和田 晴吾（立命館大学文学部教授）
- ・ 高橋 美久二（滋賀県立大学人間文化学部教授）
- ・ 辻 正明（野洲町教育委員会教育部長／平成16年3月31日まで）
- ・ 島村 平治（野洲町教育委員会教育部長・平成16年4月1日から9月30日まで／野洲市教育委員会教育部長・平成16年10月1日から）

第9期（平成17年4月1日～平成19年3月31日）

- ・ 林 博通（滋賀県立大学人間文化学部教授）
- ・ 和田 晴吾（立命館大学文学部教授）
- ・ 高橋 美久二（滋賀県立大学人間文化学部教授／平成18年3月31日まで）
- ・ 島村 平治（野洲市教育委員会教育部長・平成18年3月31日まで）
- ・ 南 喜代志（野洲市教育委員会教育部長／平成18年4月1日から）

第10期（平成19年4月1日～）

- ・林 博通（滋賀県立大学人間文化学部教授）
- ・和田 晴吾（立命館大学文学部教授）
- ・南 喜代志（野洲市教育委員会教育部長）

【野洲市教育委員会事務局（関係分）】

平成16年度（9月30日まで：野洲町）

教育長 大堀義治 教育部長 島村平治 教育部次長 高田利江子
文化財保護課長 吉川和則 主 査 田中理司 主 査 進藤 武 主 任 角 建一
嘱託調査員 西山佳宏 嘱託調査員 瀧口泰孝 嘱託調査員 大東 悟（7月1日から）

平成16年度（10月1日から：野洲市）

教育長 大堀義治 教育部長 島村平治 教育部次長 高田利江子
総括マネージャー 三上秀子
文化財保護課長 吉川和則（12月31日まで） 山本利夫（1月1日から）
課長補佐 辻 広志（12月31日まで） 主 査 徳網克己 主 査 山田謙吾
主 査 田中理司 主 査 進藤 武（12月31日まで） 主 査 花田勝広（1月1日から）
主 査 杉本源造（1月1日から） 主 任 河合順之（12月31日まで） 主 任 角 建一
嘱託調査員 西山佳宏 嘱託調査員 瀧口泰孝 嘱託調査員 大東 悟

平成17年度

教育長 大堀義治 教育部長 島村平治 教育部次長 高田利江子
総括マネージャー 松橋登志夫 文化財保護課長 荻原 巧 主 査 花田勝広
主 査 徳網克己 主 査 山田謙吾 主 査 田中理司 主 査 杉本源造
主 任 角 建一 主 任 福永清治
嘱託調査員 西山佳宏 嘱託調査員 瀧口泰孝 嘱託調査員 大東 悟

平成18年度

教育長 大堀義治 教育部長 南 喜代志 教育部次長兼総括マネージャー 松橋登志夫
文化財保護課長 荻原 巧 主 査 花田勝広 主 査 徳網克己 主 査 田中理司
主 査 杉本源造 主 任 角 建一 主 任 福永清治
嘱託調査員 瀧口泰孝 嘱託調査員 大東 悟 嘱託調査員 佐野由美子

平成19年度

教育長 大堀義治 教育部長 南 喜代志 教育部次長兼総括マネージャー 松橋登志夫
文化財保護課長 荻原 巧 主 査 花田勝広 主 査 徳網克己 主 査 山田謙吾
主 査 杉本源造 主 任 角 建一 主 任 福永清治
嘱託調査員 大東 悟 嘱託調査員 佐野由美子

- 9 発掘調査および保存整備にあたって下記の方々および関係機関よりご指導を賜った。記して感謝申し上げます。

高橋美久二・田中勝弘・林 博通・和田晴吾・文化庁・滋賀県教育委員会・（株）野洲サルベージ・（有）梁川組・（株）空間文化開発機構

目 次

巻頭図版

序 文

例言・凡例

目 次

挿図目次

写真目次

第Ⅰ部 調査報告

第1章 位置と環境 1

第2章 発掘調査

第1節 昭和57（1982）年度の調査 4

第2節 平成16（2004）年度の調査 8

第3節 富波古墳周辺の調査結果 14

第Ⅱ部 保存整備報告

第1章 史跡整備に至る経過

第1節 史跡指定と公有化 19

第2節 整備基本計画 19

第3節 調査整備委員会 20

第2章 保存整備

第1節 平成17年度の整備 21

第2節 平成18年度の整備 38

第3節 保存整備事業総括 44

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	野洲市内主要古墳分布図	2
第2図	調査地位置図	4
第3図	昭和57年度調査 遺構平面図	5
第4図	出土遺物実測図（昭和57年度・平成16年度）	8
第5図	平成16年度調査区配置図	10
第6図	第1調査区 平面図・周壁断面図	11
第7図	第2調査区 平面図・周壁断面図	12
第8図	第3調査区 平面図・周壁断面図	13
第9図	富波古墳とその周辺図	15
第10図	平成17年度保存整備工事 整備計画平面図	23
第11図	平成17年度保存整備工事 施設平面図	24
第12図	透水性脱色アスファルト舗装断面詳細図、インターロッキング舗装・ 同B断面詳細図、土留擁壁標準断面詳細図・入口部断面詳細図	25
第13図	切石縁石・同B断面詳細図、地先境界ブロック断面詳細図、 案内板基礎正面断面詳細図、車止め平面図・断面詳細図	26
第14図	パーゴラ立面図・平面図・断面図・柱詳細図	27
第15図	縁台正面図・側面図・平面図、 ベンチ平面図・正面断面詳細図・側面断面詳細図	28
第16図	平成17年度保存整備工事 造成平面図	29
第17図	墳丘造成断面図	30
第18図	墳丘造成断面図・造成断面図	31
第19図	平成17年度保存整備工事 雨水排水平面図	32
第20図	U型側溝断面詳細図、暗渠透水管断面詳細図、暗渠排水管断面詳細図、 会所側溝断面詳細図、暗渠排水管B断面詳細図	33
第21図	平成17年度保存整備工事 給水設備平面図	34
第22図	散水栓、止水栓、量水器、HIVPφ20	35
第23図	平成17年度保存整備工事 植栽平面図	36
第24図	生垣支柱、二脚鳥居支柱	37
第25図	平成18年度保存整備工事 整備計画平面図	39
第26図	平成18年度保存整備工事 施設平面図	40
第27図	案内板平面図・正面詳細図・背面詳細図・側面断面詳細図	41
第28図	解説板平面図・正面図・断面詳細図、看板平面図・正面図、 看板B平面図・正面図	42
第29図	スロープ平面図・断面図・透水性脱色アスファルト舗装詳細図	43

写真目次

- 巻頭写真 富波古墳全景（南東から；昭和57年発掘調査時）
- 巻頭写真 富波古墳整備後全景（南東から）
- 写真1 富波古墳遠景（北西から；写真上、道路をはさんだ向かい側にあるのが亀塚古墳）
- 写真1 富波古墳全景（北西から）
- 写真2 調査地全景（北西から）
- 写真2 富波古墳全景（西から）
- 写真3 富波古墳前方部先端および周濠西側部分（南から）
- 写真3 円形周溝墓（西から）
- 写真4 周濠南側くびれ部検出土坑 遺物出土状況（南東から）
- 写真4 富波古墳出土土器
- 写真5 富波古墳整備前全景（西から；平成16年度調査前現況）
- 写真5 富波古墳平成16年度調査 調査区全景（南から）
- 写真6 第1調査区全景（南東から）
- 写真6 第1調査区全景（北西から）
- 写真7 第1調査区全景（南西から）
- 写真7 第1調査区東隅 富波古墳周濠西隅部検出状況（西から）
- 写真8 第2調査区全景（南東から）
- 写真8 第2調査区全景（北西から）
- 写真9 第3調査区全景（南東から）
- 写真9 第3調査区全景（北西から）
- 写真10 平成17年度保存整備工事 全景（西から）
- 写真10 平成17年度保存整備工事 全景（南から）
- 写真11 平成17年度保存整備工事 富波古墳復元
- 写真11 平成17年度保存整備工事 透水性脱色アスファルト舗装・張芝
- 写真12 平成17年度保存整備工事 地先境界ブロック・散水栓
- 写真12 平成17年度保存整備工事 切石緑石
- 写真13 平成17年度保存整備工事 多目的広場インターロッキング舗装・車止め
- 写真13 平成17年度保存整備工事 土留擁壁・サツキツツジ植栽・ベンチ
- 写真14 平成17年度保存整備工事 パーゴラ・ベンチ・インターロッキング舗装
- 写真14 平成17年度保存整備工事 緑台
- 写真15 平成17年度保存整備工事 U型側溝・グレーチング蓋・張芝・カイズカイブキ生垣
- 写真15 平成17年度保存整備工事 植栽（ヤマモモ・ヤマザクラ）
- 写真16 平成18年度保存整備工事 全景（南東から）
- 写真16 平成18年度保存整備工事 案内板
- 写真17 平成18年度保存整備工事 解説板
- 写真17 平成18年度保存整備工事 案内板（裏側）・看板
- 写真18 平成18年度保存整備工事 看板B
- 写真18 平成18年度保存整備工事 スロープ

第Ⅰ部 調査報告

第1章 位置と環境

琵琶湖の南東部に位置する野洲市は、鈴鹿山脈に源をたどる県下最大河川野洲川により形成された肥沃で広大な扇状地や沖積地の一角に位置している。

富波古墳は北緯35度4分49秒、東経136度1分54秒に位置しており、野洲市域のほぼ中央付近の平野部にあたる。市内の最高地点は432mを測る三上山の山頂であるが、富波古墳一帯は93m前後の標高に位置している。周囲半径150m内には史跡大岩山古墳群のうちの古富波山古墳や亀塚古墳があり、県の南北を結ぶ主要幹線道路やJR琵琶湖線にもほど近い。また、250m南東側には室町時代前期に創建され重文の本殿を有する生和神社がある。

次に、歴史的環境について触れてみる。野洲市内では、小堤遺跡や大篠原西遺跡等で古くはナイフ型石器をはじめとする後期旧石器時代の石器が見つかった。

縄文時代の遺物も五之里遺跡や市三宅東遺跡、虫生遺跡や八夫遺跡で後期～晩期と思われる土器片や石器が出土しているものの、具体的な遺構の発見にまでは及んでいない。

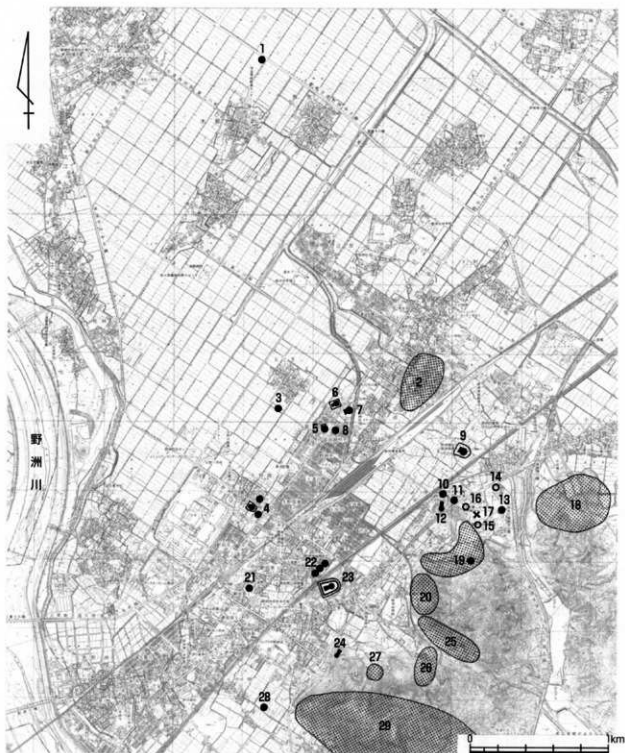
ところが、弥生時代前期になると野々宮遺跡で土坑が、また西河原森ノ内遺跡や湯ノ部遺跡、八夫遺跡等で遺物の出土や遺構が検出されている。しかしながら、これらの時期の検出遺構や遺物の数量は多くなく、増加傾向がみられるのは中期後半以降である。

具体例を挙げると、富波東遺跡で中期後半の方形周溝墓が、市三宅東遺跡や五之里遺跡等で竪穴住居や方形周溝墓が検出されている。加えて、八夫遺跡や小比江遺跡、虫生遺跡で環濠の一部や方形周溝墓が、木部遺跡で水田跡が後期にかけて見つかった。小篠原遺跡の北東縁辺に位置する場所では、古墳時代の初め頃にかけての土坑墓が600基以上発見されている。

一方、小篠原の大岩山丘陵では明治14（1881）年に14個の、昭和37（1962）年に10個の計24個の銅鐸が出土している。1ヶ所からの出土量としては平成8年に鳥根県の加茂岩倉遺跡から見つかった39個につく数量である。大岩山銅鐸は分類的には新しい段階のもので占められており、そのなかには日本最大の銅鐸（134.7cm）も含まれている。

このように、野洲市域では弥生時代の中期から後期にかけて人々の営みの痕跡を窺い知ることができる。最新の調査事例を挙げると、中畑古里遺跡の調査において弥生時代後期初頭頃のものと思われる五角形の平面プランを有する竪穴住居が発見されている。この竪穴住居は県内最古級の時期が推定されており、その成立や背景が注目される遺構である。

古墳時代の幕が開き、市内でも古墳の造営が始まる。今回報告する富波古墳はまさにその黎明期に築造されたもので、3面の三角縁神獣鏡が出土した古富波山古墳とともに大字富波一帯で営まれた前期の古墳である。前期古墳はこの他にも上述した大岩山丘陵に2基の古墳が築造されていた。これらの古墳は消滅し現存しないものの三角縁神獣鏡をはじめとする計6面の銅鏡が出土しており、注目に値する。中期には、平成14年度の史跡整備に伴う発掘調査で特異な造出形状を有する古墳であることが判明した大塚山古墳や今後実態解明に向けて調査・整備を実施予定の亀



第1図 野洲市内主要古墳分布図

- | | | | | |
|---------------|--------------|-------------|----------------|--------------------|
| 1. 木部天神前古墳 | 2. 野々宮古墳群 | 3. 五之里古墳 | 4. 久野部古墳群 | 5. 富波字竹ノ花所在古墳 |
| 6. 富波古墳 | 7. 龜塚古墳 | 8. 古富波山古墳 | 9. 大塚山古墳 | 10. 甲山古墳 |
| 11. 円山古墳 | 12. 天王山古墳 | 13. 宮山2号墳 | 14. 宮山1号墳(消滅) | 15. 大岩山第二番山林古墳(消滅) |
| 16. 大岩山古墳(消滅) | 17. 大岩山銅鐸出土地 | 18. 吉祥寺古墳群 | 19. 桜生古墳群(7号墳) | 20. 福林寺古墳群 |
| 21. 小篠原1号墳 | 22. 和田古墳群 | 23. 林ノ腰古墳 | 24. 越前塚古墳 | 25. 田中山古墳群 |
| 26. 山脇古墳群 | 27. 野々口古墳群 | 28. 妙光寺塚越古墳 | 29. 妙光寺古墳群 | (下線は史跡「大岩山古墳群」) |

塚古墳、須恵器工人の埴輪製作への関与が読み取れる五之里古墳が大字辻町～富波～五之里にかけての平野部に築造される。

後期になると、小篠原一帯に首長墓が造営される。桜生エリアには大岩山古墳群の天王山古墳・円山古墳・甲山古墳が、妙光寺山先端部の独立丘陵頂部には全長約50mを測る前方後円墳の越前塚古墳が、そして平野部では1996年の調査で発見された、墳丘長約90mで二重の周濠を有する大型前方後円墳の林ノ腰古墳がある。

野洲川の下流域である旧中主町域では、中期～後期にかけて埋没古墳群の御明田古墳群が吉地～六条地先で発見されている一方、木部地先では直径約40mの円墳である木部天神前古墳がある。このように市内における古墳の分布については把握できる一方で、当該期の集落域については未だ不明な実態がある。

この時期、いわゆる「群集墳」と呼ばれる古墳群が旧野洲町内においても山裾や丘陵地帯に分布している。具体的には、三上山から妙光寺山、田中山へと続き、その後小堤から大篠原にかけての山麓や丘陵部に多くの群集墳が分布している。ただ、三上山麓については南麓にわずかに数基程度古墳が確認されるのみで、他とやや様相を異にしている。

そのうち、大篠原の向山丘陵一帯に点在する群集墳の被葬者は、須恵器生産に関わりのある人々と考えられる。周辺一帯には近江地域最大の須恵器窯跡群である鏡山古窯跡群があり、そのような観点からも非常に興味深い場所である。鏡山古窯跡群の操業が全盛であった6世紀後半～7世紀前半にかけての時期に生産された須恵器のなかには特筆すべきものも見られる。例えば、中畑古里遺跡で出土した、坏身をモチーフとした国内最古級の中空円面硯や、桜生7号墳で見つかった「此者□□首□□」とヘラ描きで氏姓制度を表したとみられる須恵器短頸壺などである。

飛鳥～奈良・平安時代にかけて、古代の野洲郡衙推定地とその周辺では複数の掘立柱建物が検出されている。小篠原遺跡から安城寺遺跡にかけての地域ではそれまでの堅穴住居から飛鳥～奈良時代にかけての掘立柱建物へと移行し、それが群を形成しながら建て替えられていくという変遷を読みとれる状況も明らかとなっている。

一方、白鳳期に建立された寺院、福林寺が田中山の西裾部に築かれ、以降中世まで続く。

市北西部、西河原森ノ内遺跡や湯ノ部遺跡、西河原遺跡、西河原宮ノ内遺跡等では総数100点近くにも及ぶ木簡が出土しており、中でも7世紀後半の郡符木簡・文書木簡が多数出土している。これらの遺跡は総称して「西河原遺跡群」として呼ばれており、早くからこの地に公的な施設と文字を書くことができた人々の存在を示している。

中世以降の集落遺構は市内でも多数確認されている。安城寺遺跡では、古代末から中世にかけての集落変遷をたどることのできる掘立柱建物群が、隣接する中畑古里遺跡では鎌倉時代から室町時代を中心とする屋敷地を区画する溝をはじめとする遺構などが、上永原遺跡でも大きく2時期の存在が想定される中世の屋敷地群が発見されている。また、年代的にやや下がった時期の遺跡として、野洲市大篠原の大篠原東遺跡では、現在中山道沿いに展開されている現集落の前身と思われる15～16世紀の集落跡が検出されている。

第2章 発掘調査

第1節 昭和57（1982）年度の調査

その古墳の存在は、宅地造成計画に伴い実施された野洲町（現野洲市）大字富波字亀塚甲地先の発掘調査で初めて明らかとなった。

昨年度（昭和56年度）の試掘調査で遺構の存在が認められたため、昭和57年4月から当該地の発掘調査に着手した。結果、調査区の南東側を中心に円形周溝状遺構や掘立柱建物、溝や土坑などの遺構を検出した。また当初幅広の溝と認識していた遺構については、調査後半時にそれが前方後方形に巡る周濠であることが判明し、当初予定していた調査期間を延長して調査を進めることとなった。

調査方法や基本層序、遺構や遺物の詳細な説明は例言でも記したとおり既刊の報告書に譲るが、ここでは検出された主な遺構や遺物の概要について再度確認していく。

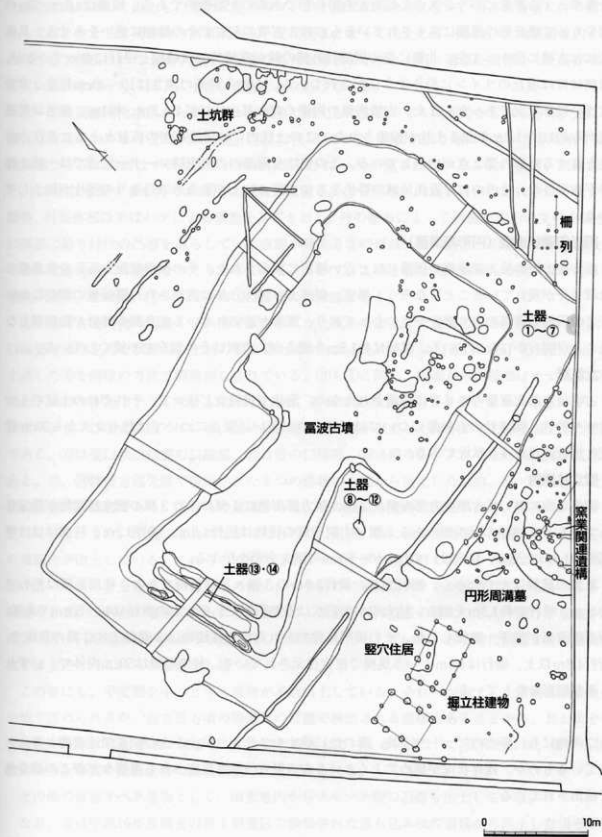
1) 遺 構

前方後方墳（富波古墳）

墳丘部は後世の削平を受けており調査着手段階では残っていなかった。墳丘は $N-75^{\circ}-E$ の主軸方向をとる前方後方形で、全長は42mである。前方部長20m、後方部長22mを測り、後方部がやや長いものの比率的にはほぼ1:1である。周濠を含めた全長は52mをやや超える規模であ



第2図 調査地位置図



第3図 昭和57年度調査 遺構平面図

る。葺石などは確認されておらず、また主体部の詳細についても明らかではない。墳丘は長軸線を基準とする非常にバランスのとれた左右対称形であるのが特徴的である。周濠は4.5m～7mの幅をもって墳丘部の周囲に巡らされているものの、古墳の左右でその様相に違いをみせる。具体的には古墳に向かって左、北側に巡る周濠は外側の線が直線的で長軸線と平行になっているが、南側はほぼ墳丘のラインに沿うように配されている。これら周濠の深さは10～30cm程度と非常に浅い残存状況であった。また、古墳南側の周濠くびれ部内には長さ1.7m、幅1m、深さは周濠底から約1.1～1.2mを測る土坑が検出された。この土坑内には用途不明の板材とともに近江の特色を有する完形の甕2点が出土している。この他にも周濠内の南東隅コーナー付近では一括土器群が検出され、その中には近江地域の特色をもつ甕等に加え、東海系の丹塗りの壺片が出土している。

円形周溝状遺構（円形周溝墓）

前方後方墳の後方部南側の周濠にほど近い場所に検出された。その検出状況から、全体規模のほぼ半分が現れていることになろう。事実、平成2（1990）年に実施された隣接地の調査においてこの円形周溝墓の残り部分が見つかっており、周溝が途切れている北東側の部分が陸橋部となることが明らかになっている。溝幅は約1.5mを測るが、東側はその幅をやや狭くしている。

土坑群

古墳後方部北東側のエリアに確認されたもの。形状や規模など様々で、それぞれの土坑のもつ意味や特性、関連性の有無等については不明な点が多い。深さについては数センチから20cm程度と比較的浅い残存状況である。

掘立柱建物

調査地内において古墳前方部南側に2棟、後方部南側に1棟の、計3棟の掘立柱建物が想定されている。2棟並んだ西側にある3間×1間規模の建物は桁行4.8m、梁行3.2m、柱間はほぼ等間隔の1.6mを測る。柱穴はいずれも50～60cmの隅丸方形を呈する。

東側の建物はやや大きく、桁行6m、梁行3.9mの3間×3間規模である。柱間距離は桁行で約2m、梁行で約1.3mを測る。柱穴の平面形状は不整形で、それらの直径は40～50cmである。円形周溝墓が削平・埋没した後、その場所に建てられた掘立柱建物は2間以上×2間の規模で、桁行4.3m以上、梁行は4.6mという規模で推定復元されている。柱穴の径は50cm内外で、いずれも不整形をなしている。

この他にも、多くのピットや土坑、溝の他に焼土やスサ入り粘土を含む窯業関連遺構と考えられているものや、残存状況が極めてよくないものの堅穴住居と推定される遺構などがこの調査地で検出されている。

2) 遺物

調査地内において出土した遺物は整理用コンテナ箱で10箱余りに及ぶ。前方後方墳に伴う遺物としては、主として周濠内の南東隅から一定程度まとまって出土している他に、南側周濠内くびれ部付近で検出された土坑や前方部先端の長大な溝状を呈する土坑、周濠底面等から土器が出土している。そのうち、以下に主要な遺物を取りあげてみる。

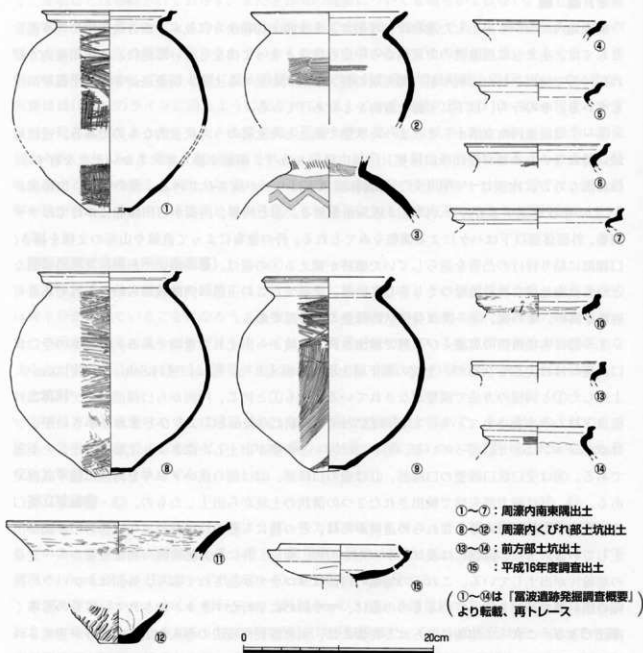
①～⑦は周濠内南東隅からまとまった状態で出土した土器のうち代表的なものである。近江地域に特有ないわゆる「受口状口縁甕」①は口径13.8cmで、胴部が張り球にちかい形状を有する。口縁部ならびに内面はナデ仕上げ、外面体部以下はハケが施されている。②の甕は、口縁部が「く」の字状を呈するもので、口径は16.3cmを測る。①と同様、内面から口縁部にかけてはナデ調整、外面体部以下はハケによる調整をみてとれる。丹の塗布によって直線や山形の文様を描き、口頸部に貼り付けの凸帯を巡らしていた痕跡が窺える③の壺は、その胎土や形態、文様の特徴などから東海地域に特徴的なつくりをしている。よって、この土器は同地域からの搬入品である可能性が高い。その他、④～⑦は受口状口縁甕の口縁部である。

⑧～⑫は古墳南側の周濠くびれ部で検出された土坑から出土した遺物である。⑧と⑨の受口状口縁甕はほぼ完形な状態で、土坑の最下層上面から出土した。⑧は口径14.8cm、器高21.0cmで、上述した①と同様の方法で調整がなされている。⑨も①と同じ、内面から口縁部はナデ、体部外面以下はハケが施されている。口径は13.7cm、器高は20.0cmと①よりひとまわり小さいが、プロポーションは⑧と似通っている。⑩～⑫は⑧・⑨の甕が出土した深さより上層で出土した土器である。⑩は受口状口縁甕の口縁部、⑪は壺の口縁部、⑫は幅の広いタタキを外面に施す底部である。⑬、⑭は前方部先端で検出された2つの溝状の土坑から出土したもの。⑬・⑭ともに受口状口縁甕の口縁部である。これらの遺構からは、その他にも壺の口縁部や高坏、器台の一部が出土している。また、図化には及ばなかったものの、周濠、特に後方部南側の周濠上層から一定量の埴輪片が出土している。これらの埴輪の内面はヨコナデが施されており、外面はタテハケの後幅の広いヨコハケを施しているものの他に、やや斜めに平行なタタキが施されているものも多く確認できる。これらの埴輪にみられる特徴には、須恵器製作技法の導入や工人の関与が想定される。一方、円形周溝墓の溝からも甕や壺の口縁部片が出土している。古墳時代前期までの遺物の大半は上述したこれらの遺構から見つかっている。

この他にも、平安期を中心とする遺物が多数出土している。それらが出土した遺構は調査地の全域で認められるが、前方後方墳の周濠部の位置で検出される遺構もあることから、おおそ平安時代の後半には周濠部は埋まっていたことを示しているといえよう。具体的には、溝や土坑、柱穴から土師器や黒色土器の皿・碗類の出土がみられる。

その他の留意すべき遺物として、調査地内からチャート製の石器も出土している。

なお、⑮は平成16年度調査の第1調査区で検出された落ち込み状の遺構から出土した須恵器有蓋高坏の坏部である。図化に及ぶことができたものはこの1点のみであった。復元口径は12.4cmを測り、外面には自然釉の付着を認める。わずかに脚部の痕跡を看取することができる。



第4図 出土遺物実測図(昭和57年度・平成16年度)

第2節 平成16(2004)年度の調査

富波古墳発見の契機となった昭和57(1982)年の発掘調査の概要については上述したとおりである。この年の調査で基本的には調査地全域約4,000㎡の表土を掘開し、遺構検出が行われた。結果、制約のある調査期間等の理由に加え、北西側には顕著な遺構がほとんど認められなかったために、富波古墳を含めた南東側のエリアについて重点的に掘削・調査が実施された。

については、平成17年度からの富波古墳の保存整備工事に着手にあたり、現況地盤から遺構面まで

の深さや富波古墳の正確な位置、昭和57年の調査で検出のみとなっている北西部の遺構の状況確認を主眼としてトレンチ調査を実施した。調査期間は、平成17年2月4日から2月22日までで、3つの調査区を設定し計245㎡の調査を行った。

平成16年度調査の概要

第1調査区

調査地北西側に設けた3つの調査区のうち、最も西側に設置した15m×7mの調査区。GL-0.9mで青灰色粘質土の遺構面を確認し、不定形の落ち込み（SO-01）、溝状の遺構やピット、土坑が検出された。しかしながら、大半の遺構が浅かったりまたは遺構の輪郭が不明瞭なものも多く、結果、遺構の種別や年代の特定に至るのが困難な状況であった。出土遺物は、SO-01から出土した須恵器の有蓋高坏の坏部片と（第4図⑮）、土師器片、調査区中央に検出されたピット列のうちのひとつ（SP-01）から土師器片が出土したのみである。この調査区は遺構の実態把握以外に富波古墳の位置確認という目的もあったため、昭和57年の報告書や調査図面、写真等からおおよその位置を推定しこの場所に設定したのであるが、ほぼ推測どおりの位置に富波古墳の周濠北西コーナー部を確認した。周濠内には山砂が搬入されて遺構面の保護措置がとられており、その深さは約25～30cmであることが確認された。

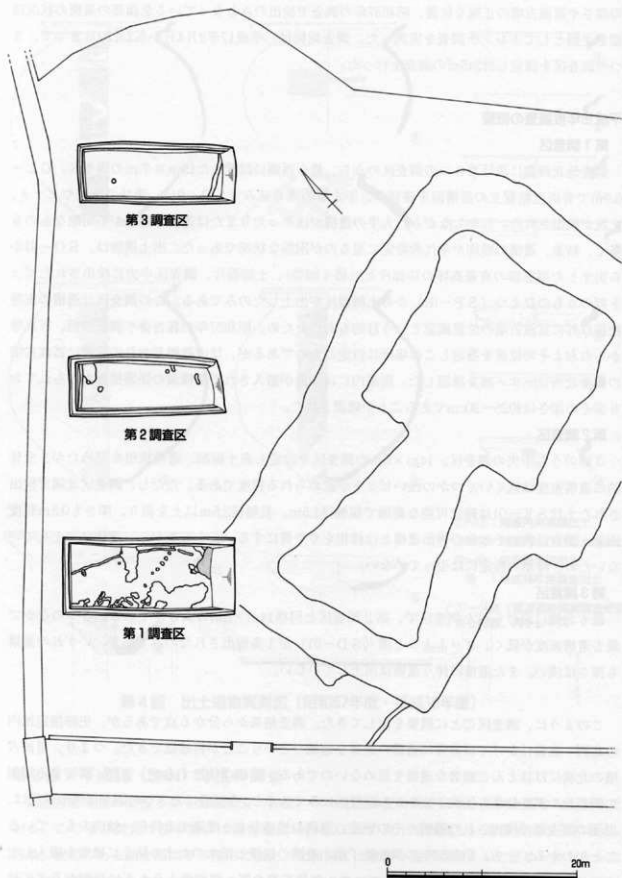
第2調査区

3つのうち中央の調査区。14m×5mの調査区を設定し表土掘削、遺構検出を進めたが、全体的に遺構密度は低くいくつかの浅いピットが認められる程度である。ただし、調査区北隅で検出された土坑SK-01は確認可能な範囲で短軸径1.5m、長軸径2.5m以上を測り、深さも0.3m程度あり、調査区内のその他の検出遺構とは様相をやや異にする。しかしながら、遺物は出土していないため、時期の特定には至っていない。

第3調査区

最も北側に設けられた調査区で、第2調査区と同様14m×5mの大きさである。3つのなかで最も遺構密度が低く、ピット1つと溝（SD-01）が1条検出されたのみである。いずれの遺構も深さは浅い。また遺構に伴う遺物は出土していない。

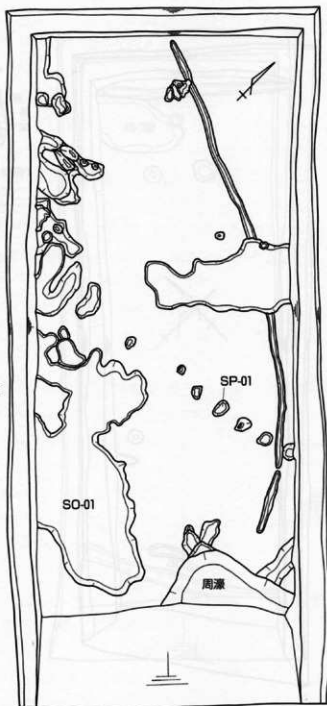
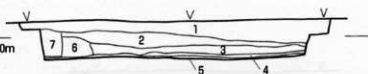
このように、調査区ごとに概要を記してきた。調査結果から分かる点であるが、史跡指定地内の北西～北側にかけは非常に遺構の希薄な地域だということが再確認できた。つまり、富波古墳の北側にはほとんど顕著な遺構を認めないのである。詳細は後述するが、実際、隣接する周囲の調査地の調査結果も反映させながら巨視的にみても、今回設けた3つの調査区内の状況は、周囲の調査地で検出された遺構やその密度、遺構の性格などと関連する特色・傾向をもっていることがわかる。一方、昭和57年の調査終了後、遺構の保護と雨水のたまり防止に幾度か搬入した土砂は平均して約90cmの厚さになっていた。整備工事の際、現況面よりも下に掘削が及ぶ工種については、これらのデータを考慮し十分な保護層を確保したうえで工事を進めることにした。



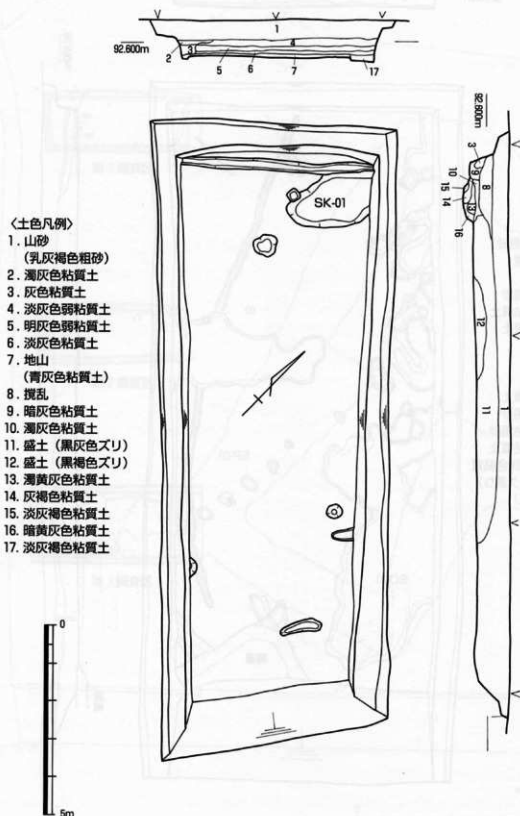
第5図 平成16年度調査区配置図

〈土色凡例〉

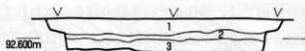
1. 山砂
(淡黄褐色粗砂)
2. 灰褐色礫混
弱粘質土
3. 濁灰褐色粗砂
4. 暗灰色強粘質土
5. 灰色強粘質土
(溝埋土)
6. 攪乱
7. 攪乱
8. 暗灰色粘質土
9. 濁灰褐色粗砂
10. 濁黄灰褐色粗砂
11. 淡灰褐色粘質土
(地山—青灰色粘質
土ブロック混り)
12. 黒灰色ズリ



第6図 第1調査区 平面図・周壁断面図

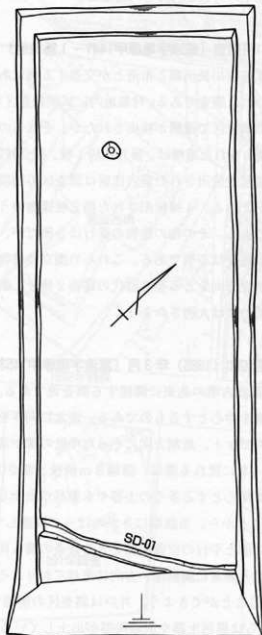


第7図 第2調査区 平面図・周壁断面図



〈土色凡例〉

1. 山砂 (黄灰色粗砂)
2. 黑灰色弱粘质土
3. 淡黑灰色粘质土
4. 褐褐色粗砂混粘质土
5. 黄褐色粗砂混弱粘质土
6. 淡灰色粘质土



第8图 第3调查区 平面图・周壁断面图

第3節 富波古墳周辺の調査結果

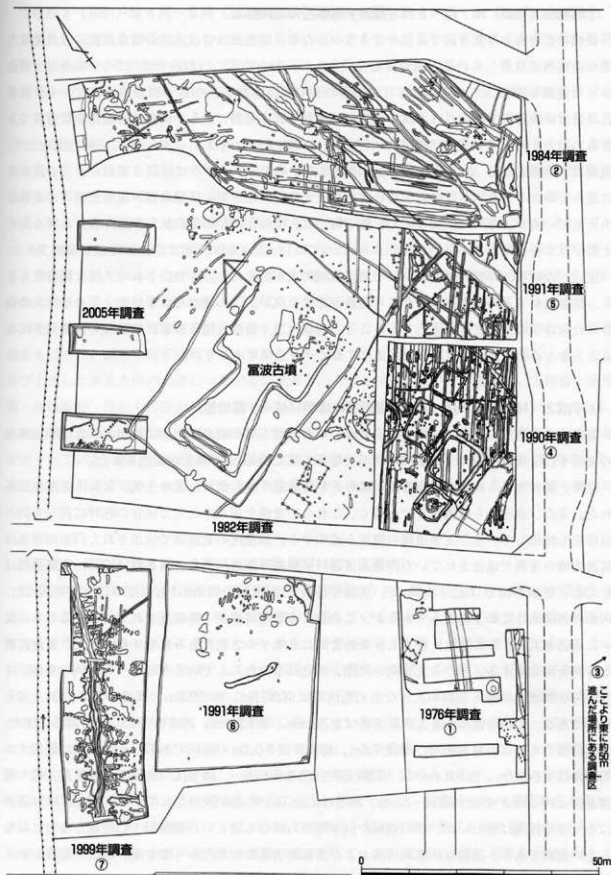
富波古墳が所在する調査地の周辺では、現在までに多数の調査が行われている。結果、富波古墳それ自体の全容に加え、周囲との関連性や巨視的に捉えた中での位置づけ等、総合的に考察できる情報の蓄積が整ってきている。本節では、富波古墳の周辺で過去に実施された調査事例の概要について触れるとともに、若干の考察を行うものである。

①昭和51(1976)年9月～11月調査(富波字亀塚甲1441-1番地他)

富波古墳の南南西、県道大津能登川長浜線と市道とが交差する角にあたる調査地で、富波古墳が発見される以前に近隣で行われた調査である。対象地内に試掘調査区を設定し調査を実施した。結果、南西側を除くほとんどの調査区で遺構が検出されたが、それらの調査区では必要に応じ拡張を行い実態把握に努めた。検出された遺構は、竪穴住居1棟、掘立柱建物4棟の他に土坑や溝、ピット等である。調査区の北端部で検出された竪穴住居は調査区の制限を受け南端部のみの確認にとどまったために詳細は不明である。4棟検出された掘立柱建物のうち、全容のつかめるものは2間×2間規模の1棟のみである。その他の建物の梁行は2間だが、桁行については調査区外に及ぶものと推定され全容については不明である。これらの掘立柱建物はいずれも現在の地割方向と同一方向をなさず、ほぼ南北方向をとる奈良時代の建物2棟と、調査区南側に展開し鎌倉期と想定される2棟の建物に時期的には大別されよう。

②昭和59(1984)年11月～昭和60(1985)年3月(富波字亀塚甲1453-2番地他)

富波遺跡の北側に位置し、富波古墳の北東に隣接する調査地である。調査面積は2,000㎡を超える。検出された主な遺構は溝を中心とするものである。南北に向きをなす古墳時代の溝や平安時代～中世頃とみられる井戸やピット、地割方向にそった中世の溝や落ち込み等が見つかっている。調査区のほぼ中央を南から北に流れる溝は、溝幅3m前後、深さ0.5～0.6mを測る大溝である。この溝からは、古墳時代を中心とする多くの土器や木製品が出土した。特に、古くは布留式併行期の土器が出土していることから、当該期にさかのぼって機能していたことを示している。この南北大溝の近辺には、この溝と平行の位置関係をとる数条の溝も同時に確認されている。この大溝は富波古墳の向きや配置と非常に関係深い方向に流れており、その様相は富波古墳の墓域の北限を示すものとして考えることができよう。井戸は調査区の南端で検出されている。径0.8m、深さ0.6mを測り、内部からは黒色土器や灰釉陶器が出土している。調査区中央を流れる大溝の西側や井戸の西側に広がるピット群は掘立柱建物を形成した可能性があり、地割方向に向きをなす溝とともに集落を形成していた遺構の一部として認識できる可能性がある。遺物は上述した大溝から多くの土器や須恵器、鋤先などの木製品が出土している。この大溝から出土している遺物には東海系の土器や初期須恵器などが含まれ、一般的な集落で散見される遺物とはやや性格を異にする状況がある。その他には緑釉陶器や灰釉陶器、黒色土器等の出土遺物を認める。



第9図 富波古墳とその周辺図

③昭和60(1985)年7月～8月(富波字亀塚乙197番地)

紙幅の都合もあり第9図では紹介できなかったが、調査地は富波古墳の南東側に、また亀塚古墳の南南西に位置している。調査面積は約240㎡とそれほど広くはないが、ピットや土坑、溝といった遺構を検出している。これらの遺構の大半は現地表面下約60cmで検出されている。調査区のほぼ中央付近で検出された溝を除き、いずれも伴出遺物に乏しく明確な時期比定に言及できるものはない。多くの遺物が出土し中央付近で確認された溝はN-13°-Eに主軸方向をとり、規模は平均幅2.4m、深さ0.4mを測る。溝底は南から北にゆるやかに傾斜しており、この溝が北に流れていたことを示している。この溝からは土師器・須恵器・灰釉陶器・黒色土器等の遺物が出土しているが、その時期幅は広く、最下層では古墳時代初頭の受口状口縁甕や壺、高坏などの土器が見つかる一方、最も新しいところでは12～13世紀にかけての土師器皿も看取できる。

上述した昭和59年度の調査において富波古墳の東から北にかけて検出された大溝と同方位をとり、位置的にもその大溝につながる可能性が非常に高い。この溝からは手焙形土器や山形文の施された東海系の壺なども出土していること、亀塚古墳や富波古墳と非常に興味深い位置関係にあることなどから、当該地において留意しておくべき遺構であろう。

④平成2(1990)年7月～11月(富波字亀塚甲1440-1番地他)

富波古墳の南側に隣接する調査地。昭和57年の富波古墳の調査区南側で検出された円形周溝墓の実態や古墳南側に展開する遺構の状況把握を主眼に約900㎡の調査が実施された。

結果、隣接地から続く円形周溝墓1基や方形周溝墓4基の他に、溝や土坑、ピット等が検出された。また、水田から遺構面までが浅く、これらの遺構を切るかたちで現在の畦畔に同一方向の耕作痕も検出している。主要遺構の概要を説明する。調査区の北西隅で検出された円形周溝墓は富波古墳の南側で確認されていた円形周溝墓の東側約半分に相当し、結果直径約10m、周溝幅は1～2m、周溝の深さは0.2～0.3mで、周溝を含めた直径は12～13mほどになることが判明した。円形の周溝墓はこの1基のみであるが、この他に方形周溝墓が4基確認されている。これらは互いに周溝を共有することなく独立し、東西方向に2基ずつ2列にならんでいる。また、富波古墳と方向を同じくする。南から北に向いた際、南北に2列にならんでいるもののうち南列の東側、4つの方形周溝墓中最も規模の大きな方形周溝墓は東西11m、南北9.6m、周溝の深さ0.4mを測る規模である。この西側にある方形周溝墓は東西6.8m、南北6.3m、周溝の深さ0.3mを測る。また、北列西側のものは、東西9.6m、南北7.8m、周溝の深さ0.3mの規模である。その東側に展開する周溝墓は東西6.3m、南北6.8mで、周溝の深さは0.2mと浅い。調査区の南端では、富波古墳や周溝墓群と同じ向きをなす幅5.1～5.5m、深さは0.2mほどの溝が検出されている。調査区外は道路になり全容把握は難しいが、その規模や向き等から単なる溝という理解以上に留意しなければならない遺構である。遺物は円形周溝墓および方形周溝墓の周溝内から壺や甕、器台や鉢等が出土しており、これらはその特徴から古墳時代初頭頃の土器として認識されるもので占められている。

⑤平成3 (1991) 年4月～6月 (富波字亀塚甲1440-6番地)

前年度に実施した調査(④)の北東側、富波古墳の方からみて東から南東側に隣接している調査区で、約680㎡の調査を実施し、溝や土坑、ピット等の遺構が検出された。これらのうち、最も規模の大きなものは調査区中央やや東よりで検出された平均幅約4m、深さ約0.5mの溝である。この溝はほぼ南北方向をとり、南から北へ流れていたものと思われる。②で説明した南北方向をとる溝に続くものである。途中が未調査箇所にあたるため断言できないが、向きや出土遺物の年代などから推察して、おそらく③で紹介した溝とも関連するであろう。富波古墳との位置関係から、この溝が墓域の東限を示すものではないかと考えられる。当該地では、この他にもこの大溝と同じ南北方向をとる溝が数条確認されているが、大溝と比べると溝幅は0.3m～0.8mであり、深さは0.1m～0.3mと比較的残りが浅い。これらの溝も大溝と同様に隣接する調査区に続くことが確認されている。この他にも、現在の畦畔に同一方向の、浅い耕作痕も④の調査区同様、多数検出されている。また、10以上の土坑や不定形の遺構、ピットも検出されている。また、この調査区は富波古墳の周濠南東隅に隣接している場所のため、その部分の実態把握のために確認調査も行った。結果、境界畦畔下で山砂によって保護された富波古墳の周濠を確認し、そこから伸び上述した南北方向の大溝につながる、東西方向の溝も検出している。遺物は、土師器・須恵器・緑釉陶器・黒色土器等が出土しているが、その大半は南北方向をとる大溝からの出土である。

出土須恵器のなかには、TK208段階以前と思われる坏身や坏蓋、無蓋高坏や甕といった器種が含まれている。県内ではこの時期の須恵器窯は確認されておらず、非常に興味深い資料である。富波古墳の周濠東隅からは、近江地方の特徴を有する受口状口縁甕の一部と高坏の一部も見つかっている。

⑥平成3 (1991) 年5月～6月 (富波字亀塚甲1443-1番地)

富波古墳の道路を挟んだ南西側の調査区。対象面積のうち、周囲を除く約1,250㎡の調査を実施した。道路を介しているとはいえ富波古墳に近接していることから多くの遺構や遺物の存在が確実なものと想定され調査に着手したが、結果、予想外の結果となり遺構希薄地帯であることが判明した。つまり、古墳の墓域としてその周囲は一定程度の規制を受けていた可能性が高いことを示しているといえよう。確認された遺構は、溝や土坑、ピットである。これらの遺構は調査区の南側ではほとんどみられず、北～東半部に集中している。また、調査区の東隅で一部が検出された、溝と思われる遺構が最も深いところで約0.6m、この遺構の南隅で検出された半円形の土坑の深さが約0.8mといったように一定の深さを有する遺構も認められるが、それら以外の大半の遺構は浅いものであり、かつ遺物も非常に少ない状況である。調査区全体の遺構面をみると、ゆるやかに南から北へと傾斜しているのが看取できる。富波古墳が発見された調査区において、古墳の周辺では古墳の南側に展開する遺構の量に比して、西～北側は非常に希薄な状況を呈しているが、それらの事実と符合する結果が当該地では得られている。出土遺物は非常に少なく須恵器片が3点と剥片が1点出土している。

⑥の調査区の北西側、富波古墳の西に位置するこの調査区は、全体で約960m²の調査が行われた。細長い調査区の長辺にほぼ沿うかのように、調査区中央部を南西から北東に流れる溝が当該地の主要遺構である。北東方向にいくにしたがってその向きをやや北に向ける様相を確認できるが、調査区外へと続くために全長や詳細については不明である。溝幅は4.2～5.6mを測り、断面U字型の最深部は0.6～0.8mである。この溝には杭列を2ヶ所認め、また溝際に溝と直交するように掘り込まれた柱穴列も確認されている。溝の北側では富波古墳の調査時にも確認されている上層の溝も認められた。溝の周囲にはその他にも土坑や不整形の遺構、ピット等が検出されている。なお、調査区の南西隅で検出されたピットは掘立柱建物を構成するものと想定されている。

出土遺物としては、上述した中央に流れる溝から古墳時代の土師器片や須恵器片が出土しているが、その他に上層から下層にわたって木製品が多量に出土している。これらの木製品は加工が施された痕跡を看取できるものもあるが、全体として腐食が進んでおりその痕跡を明確にうかがえるものは少ない。調査区中央を流れるこの溝は富波古墳に近づくにしたがってその向きをやや北向きにかえていることから、その背景には富波古墳の存在を意識した様子が想定できよう。

このように、富波古墳とその周辺で今までに実施された調査結果の概要を記してきた。富波古墳が発見される以前は当該地周辺での調査事例が非常に少なく、かつ古墳の存在も認識されていなかった。したがって、富波古墳の報告書にも記載のあるとおり、調査着手段階ではこの一帯は富波遺跡内にみられる集落遺跡の北限地域に相当するであろうという予測がなされていたほどである。調査が進み古墳が発見されその後の開発に伴う調査事例が増えた結果、検出される遺構は富波古墳の他に円形周溝墓や方形周溝墓、そしてそれらを強く意識し墓域を示すかのような向きをなす溝などが多くを占めている。墓域という観点からすれば、富波古墳の北側に展開する地域の実態も今後見逃せないだろう。確かに古墳の南側では掘立柱建物の遺構を認めるが、全体的にみるならば上述した遺跡の様相から、当該地とその付近一帯は集落域よりは墓域と認識できるエリアであろう。それは亀塚古墳の存在からも肯定的であり、今後亀塚古墳やその周辺の調査によってより広い範囲のなかでの互いの位置関係や特色も明らかになっていくであろう。

第1章 史跡整備に至る経過

第1節 史跡指定と公有化

大岩山古墳群は現在8基の古墳が史跡指定を受けているが、その経緯は昭和16年12月13日、円山古墳と甲山古墳が史跡指定を受けたことに始まる（昭和16年12月13日文部省告示第860号 円山古墳・甲山古墳指定、昭和57年5月7日一部解除）。

昭和60年2月7日、史跡円山古墳・甲山古墳に加え、富波古墳、古富波山古墳、大塚山古墳、亀塚古墳、天王山古墳、宮山二号墳の6基が、比較的小さなエリア内で古墳時代を通じ連続と首長墓系譜をたどることのできる歴史的価値が認められ史跡の追加指定を受けた。また、これに合わせて指定名称も大岩山古墳群と変更されたのである（昭和60年2月7日文部省告示第15号追加指定・名称変更、平成7年3月17日一部解除）。

富波古墳が発見された場所は当初水田であった。そこに宅地造成の計画があがり、発掘調査はその工事に先立って行われた。結果、全長42mを測る、出現期の古墳のあり方を考えるうえで非常に重要な前方後方墳が検出されたことで史跡指定を受けたのである。また同時に、対象地の公有化が図られた。

土地公有化事業は昭和60年度に実施された。公有化の対象地は大字富波字亀塚甲1448番の1が1,708㎡、同亀塚甲1449番の1が1,142㎡、同亀塚甲1450番の1が2,056㎡の計3筆で、合計4,906㎡の面積を公有化した。

第2節 整備基本計画

昭和60年2月の追加指定をうけ、昭和63年3月に大岩山古墳群環境整備基本設計書を策定した。この過程では未だ十分な予備調査を実施していない状況下であったが、歴史民俗博物館を核として古墳群の整備を進め、緑と文化と歴史の息づくまちづくりの拠点的作用を果たすこと、レクリエーション空間の創出、将来、市街地化が進んだ際、緑のオープンスペースとなる空間創造に寄与することを目標に掲げて事業に着手した。

具体的方針として、各古墳の特徴を活かしつつ全体として明るく楽しい雰囲気づくりを目指すこと、広域的なレクリエーション利用に対応した計画を図る遊歩道、サイクリング道路の整備による様々な文化財、名勝、旧跡、レクリエーション施設とネットワーク化を図り、歴史民俗博物館を核として総合的な情報、解説が得られるソフト情報のサービス機能の充実を図ること、サイン・ファニチュアや景観木の統一を図り、四季の変化を味わえる空間作りなどが提案されている。

富波古墳の立地は周囲に宅地が近接する場所にある。富波古墳の基本的整備方針は、後世の削平により墳丘が現存しないことから周濠を含め古墳形状の復元が必要不可欠であった。その他に入口部に全体を見渡せる広場を設けることや花木の導入、案内板の設置が挙げられた。

これらの基本整備計画や方針に基づく一方、今までに整備を終えた古墳との調和などを図りながら、古墳の復元や広場、休憩施設や案内板等の設置を盛り込んだ富波古墳の実施設計を平成16年度に行った。

第3節 調査整備委員会

保存整備事業の着手および進行にあたっては、史跡大岩山古墳群調査整備委員会において調査方法や整備方針を検討し、県教育委員会や文化庁と協議を重ねながら事業を推進した。本節では、整備委員会で審議した方針と内容、主要な問題点と解決策等の経過について年次を追って記す。

平成15年度

富波古墳の発掘調査は昭和57年度に実施されているが、その際、遺構検出のみとなっている調査地北西部の調査が必要であることが確認された。古墳のみならず、整備エリア全体における遺構の実態把握のためにもその調査は必要で、その結果を踏まえたうえで整備計画や方法をたてることになった。整備の基本方針としては、既に整備を終えた古墳とある一定程度の調和や雰囲気づくりを念頭に入れ、そのうえで各々の古墳の特性や周辺環境を加味しながら進めていくことが確認された。具体的には、富波古墳の整備については、その墳丘は立体的な復元整備とすること、その高さについては同規模の古墳を参考に検討・決定することが話し合われた。

平成16年度

昨年度の整備委員会で遺構の実態把握の必要性が指摘された調査地北西部の調査を実施した。結果、北西部には顕著な遺構は確認されなかったが、遺構面までの深さや富波古墳周濠部西隅の正確な位置を踏まえたうえで整備計画に反映させるよう意見が出された。

整備対象地は公有化後、土砂搬入を何度か行い遺構保存につとめてきたが、未だ周辺道路等に比べやや低いため全体的に盛土を行ってから墳丘等を復元することとなった。また、前年度に決められた墳丘の立体的整備方針であるが、墳丘の上面についてはすり切りのような形状にすること、その高さについては周囲より50cm程度盛土を行うことで表現することが確認された。また墳丘は保護や崩落防止の観点から盛土のみの施工ではなく、表面に植生を施すことが提案された。

周濠については周囲よりもやや掘り下げウッドチップもしくは土色の透水舗装などで仕上げる施工方法が出された。なお、雨水が溜まらないよう、周濠部の排水計画についても十分に検討するよう指示がだされた。また、古墳南側で検出された円形周溝墓についても、その重要性から何らかの方法で明示すべきとの意見が出された。その他にも、植栽の種類や休憩施設の設置、バリアフリーの観点も考慮すべきといった議論がなされ、整備に盛り込んでいくよう審議が重ねられた。

平成17年度

検出された古墳の位置に墳丘を復元し、その表面には張芝を施すこととした。また植栽関連では高木のうちヤマモモのいくつかにおいて実のなるもの（雌株）を植えるよう要望があった。公園に2ヶ所ある入り口には車止めを設置するが、その重さや材質について協議を行い、結果、防犯・盗難面を考慮して、一定の重さのある石製とすることになった。前年度検討中であった周濠部の施工方法については透水性の脱色アスファルト舗装に決定。当該年度の整備工事内容について

はこのようにおおむね了承されたが、同時に、整備工事2年目となる平成18年度の内容についても審議された。まず案内板であるが、その本体に関しては前年度、大塚山古墳の保存整備工事で採用されたものと同じような構造・デザインですすめることを基本とすることで一致したが、貼り付ける文字板はステンレスホロー板とすることになった。一方、解説板は石製の架台に陶板製の文字板を取り付ける仕様で決定したが、その大きさは文字等の見易さや背後にある復元された墳丘の大きさや迫力等を考慮して、大塚山古墳で用いられた大きさに比して一回り大きなサイズに変更された。

これらはともに設置場所についても協議を行い、案内板については多目的広場側の入口付近に、解説板については古墳南側の周濠そばに設置することとなった。またこの他に、現在、整備された各地の古墳では犬の糞や騒音などについて苦情が寄せられている事案が増えていることから、当古墳公園においても注意看板を設置した方が好ましいという指摘を受け、これについては来年度工事で反映させることとした。

一方、墳丘へのアプローチ方法について意見が出され、バリアフリーの観点から少なくとも周濠まではスロープ等を設け、入れるようにすべきであるとの結論に達した。したがって、周濠内へ車椅子等でアプローチできるスロープ設置も来年度工事に盛り込むこととした。

平成18年度

富波古墳の保存整備工事は今年度で竣工となる。今年度工事は案内板・解説板・看板・スロープであり、それらの現場視察および内容承認が主な内容であった。

第2章 保存整備

第1節 平成17年度の整備

保存整備工事は2ヶ年にわたって実施された。工事開始初年度となったのが平成17年度である。平成17年9月から着手し平成18年3月に終了した。

まず、土工として整備対象地全域に土砂を搬入し、周辺道路高まで盛土を行った。土量は復元した墳丘等の分も含め全体で2,060㎡に及んだ。なお、墳丘の盛土方法については検討の結果、まず墳丘部分とその周辺を墳丘天溝高まで盛土を行い、その後墳丘を十分締め固めたのち墳丘部分の形状を削りだすという手順を採用した。墳丘部分のみを盛土し墳丘しながら成形を行った場合、張芝が根付くまでの一定期間内に墳丘不足から墳丘が崩落する可能性が高いことが想定されたためである。復元した墳丘のその後の経過観察から盛土は非常に安定した状況にあることから、選択した方法が適正であったと思われる。

園路広場工では、盛土による造成を行うために、古墳西側にある市道に沿って設置されている既設水路の内側に、コンクリート重力式による土留擁壁を施した。長さは67mを測り、2ヶ所の入り口部分には前面道路とをつなぐ橋を設けた。今回、古墳の周濠部は厚さ5cmの透水性脱色アスファルト舗装による明示方法とした。その施工面積は842㎡に及ぶ。

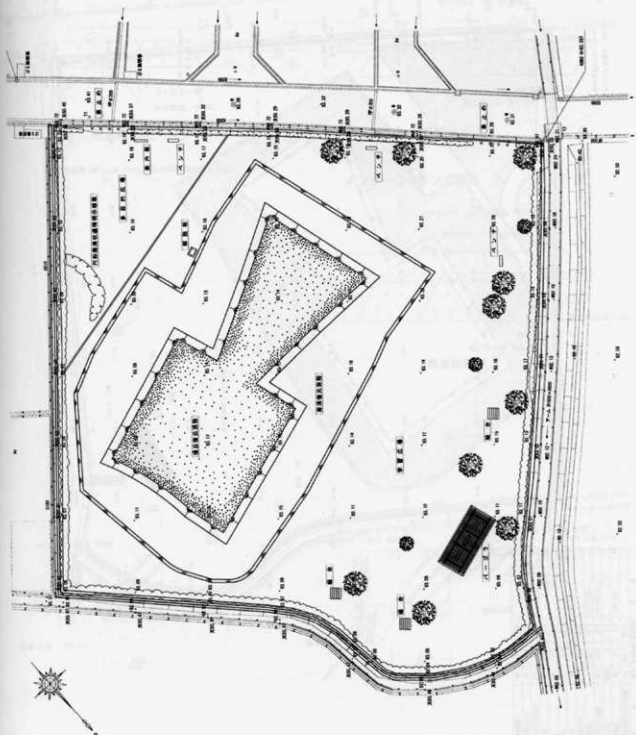
多目的広場およびバーゴラ下にはインターロッキング舗装を施した。インターロッキングブロックの仕様ならびに色はともに共通で、ベージュ・アイボリー・ライトブラウンの3色パターンである。また、両者とも境界部分にはサビ系の花崗岩による、上面にビシャン仕上げを施した切石緑石(150*150*1,000mm)を設置した。うち、バーゴラ下のインターロッキングを取り囲むように設置された切石緑石は、上面に加え外側にあたる側面にもビシャン仕上げをし、角に面取りを施した。なお、多目的広場の周囲における北端部以外の箇所には、120*120*600mmの地先境界ブロックで境界明示を行った。また、多目的広場の南西側、入り口付近には、来年度に本体設置予定である案内板の基礎工事(鉄筋コンクリート構造)を先行して実施した。

安全管理施設工としては、市道に面する2ヶ所の入り口に300*300*600mmの大きさを測るサビ系花崗岩製の車止めを4基ずつ、計8基設けた。この車止めの下部は挿し込み式になっている。基礎土台部分はコンクリート製で、その中央部に175*175*250mm、厚さ6mmの角形鋼管を埋め込み、車止めを上から挿し込む構造になっている。

休養施設工では、バーゴラ(8,700*3,600*2,850mm)を1箇所、古墳北側の学習広場に設けた。このバーゴラにはベンタキュアニューBMを加圧注入し防腐処理を施したうえに、木材表面保護着色塗料(ガードラック)を塗布した杉材が用いられている。天井にあたる部分には60*180*3,600mmのルーバーを210mmピッチという比較的狭い間隔でつけることにより、太陽の日差しをさえぎり、下に影ができるよう配慮した。8ヶ所ある柱はコンクリートの基礎で固定されている。上述したように、床部にあたる地面には切石緑石で周囲を縁取り、インターロッキングで舗装を行っている。また、そこに防腐処理を施した長さ1,500mm、径450mm内外の杉丸太製ベンチを3基設置した。丸太製ベンチはこの他にも多目的広場の案内板横に1基、古墳西側に1基、西側入り口から入ったところに1基の計6基が設けられている。また、古墳北側のバーゴラ周辺には木質複合木材製の緑台(1,500*1,505mm)を3基配した。これらの緑台の脚部はビシャン、一部打放し仕上げの擬石タマミカゲで、断面形状は楕円形を呈する。

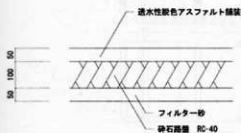
雨水排水工では、整備地内において既設水路のない南東側と北東側とに330*290*600mmのU型側溝を設け、それぞれ既設水路に雨水を排水できるようにした(施工長135m)。また、北東側の側溝は通路に隣接していることから、安全対策として鋼製のグレーチング溝蓋(歩道用細目)を据えつけた。このようにして、古墳の周囲についての雨水排水については、一部は徐々に地下浸透を図るとともに、周囲の水路ならびに側溝で排水するものとした。一方、墳丘の保水量を越え周濠へと流れ込む雨水ならびに周濠部そのものに降る雨水については、周囲よりも低位にあるという条件から側溝等の排水設備では排水が難しい。よって、透水性舗装を施した周濠部の下には、暗渠透水管(Φ200、1/3無孔管)を設置し、排水管を通して北西側と南西側の既設水路に放流することとした。

一方、植栽の維持・管理を主眼として、20mmの給水設備を設けた。整備地内のすべてに散水が可能となるよう考慮し、9基の散水栓を設置した(給水設備工)。



第10図 平成17年度保存整備工事 整備計画平面図

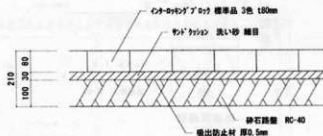
透水性脱色アスファルト舗装



断面詳細図

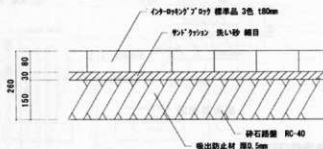
※日本道路(株)レノア・エール・P又は同等品以上とする。

インターロッキング舗装



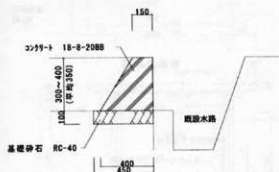
断面詳細図

インターロッキング舗装 B

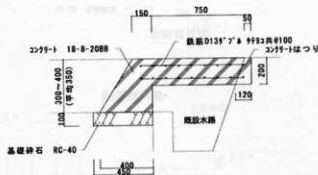


断面詳細図

土留擁壁



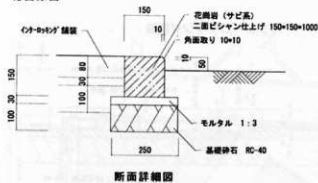
標準断面詳細図



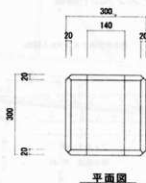
A-A断面詳細図

第12図 透水性脱色アスファルト舗装断面詳細図、インターロッキング舗装・同B断面詳細図、土留擁壁標準断面詳細図・入口部断面詳細図

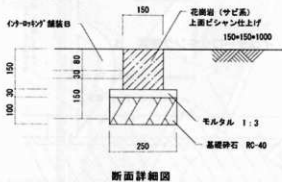
切石緑石



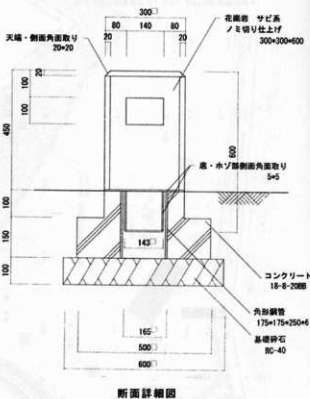
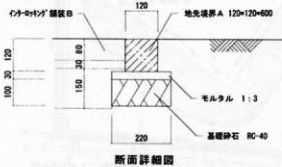
車止め (可動式)



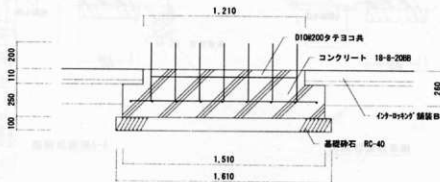
切石緑石 B



地先境界ブロック

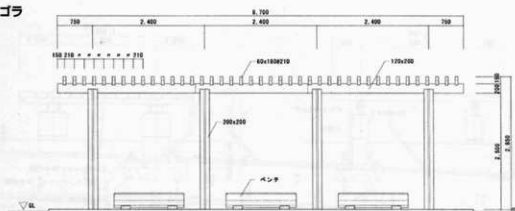


案内板基礎

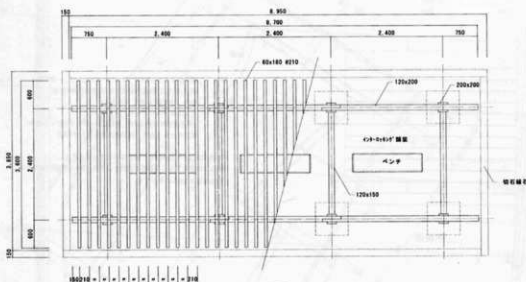


第13図 切石緑石・同B断面詳細図、地先境界ブロック断面詳細図、案内板基礎正面断面詳細図、車止め平面図・断面詳細図

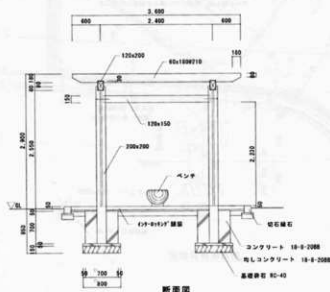
パーゴラ



立断面図



平面図



断面図



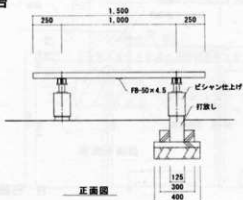
柱詳細図

パーゴラ 仕様仕様	
材	木材とする。
材	木材は防腐剤注入に調するように入管又は木工防腐剤を使用する。
材	木材はブルーナー加工とする。
防腐剤注入法	木材はすべてベンチキュアニューメーを注入する。
防腐剤	ベンチキュアニューメーを使用する。
加工法	加工法は、木材の含水率 (11% ± 3%) により決定する。
防腐剤の品質	防腐剤の品質は、防腐剤の品質により決定する。
ボルト及びナット	ボルト及びナットは、防腐剤の品質により決定する。
ボルト	ボルトは、木材の含水率 (11% ± 3%) により決定する。

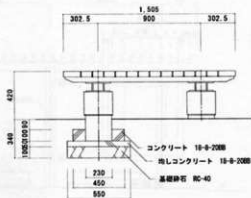
(注) 木材は防腐剤注入法による防腐効果は、防腐剤の品質により決定する。木材の含水率 (11% ± 3%) により決定する。防腐剤の品質は、防腐剤の品質により決定する。防腐剤の品質は、防腐剤の品質により決定する。

第14図 パーゴラ立断面図・平面図・断面図・柱詳細図

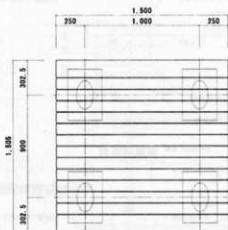
緑台



正面図



側面図



平面図

仕様

- 緑石タマシカグ(イナダ)、ビシヤン仕上げ、一部打放し
- 金物：鋼材、再生PE粉体塗層仕上げ(再生PE100%含有)
茶色(近似色 日産工 A15-200)
- 屋根：アイソスーパード、
(無可塑性本質複合木材、本粉55%・ポリプロピレン45%)
端部キャップ処理、保護塗料塗布仕上げ(3層)

※本製品は(株)サカエ製品、或いは本仕様以上とする。

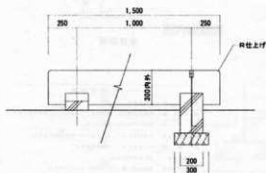
※製品に起因して生じた損害を賠償する保証(日本公園施設賠償責任保険制度)に加入の事とする。

ベンチ

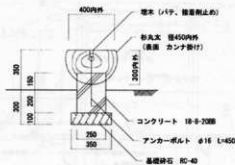


平面図

- ※ 本材は、防腐剤等注入品とし、必ず貫孔を入れること。
ボルト締めは、壁面に行い埋木を完全に行うこと。

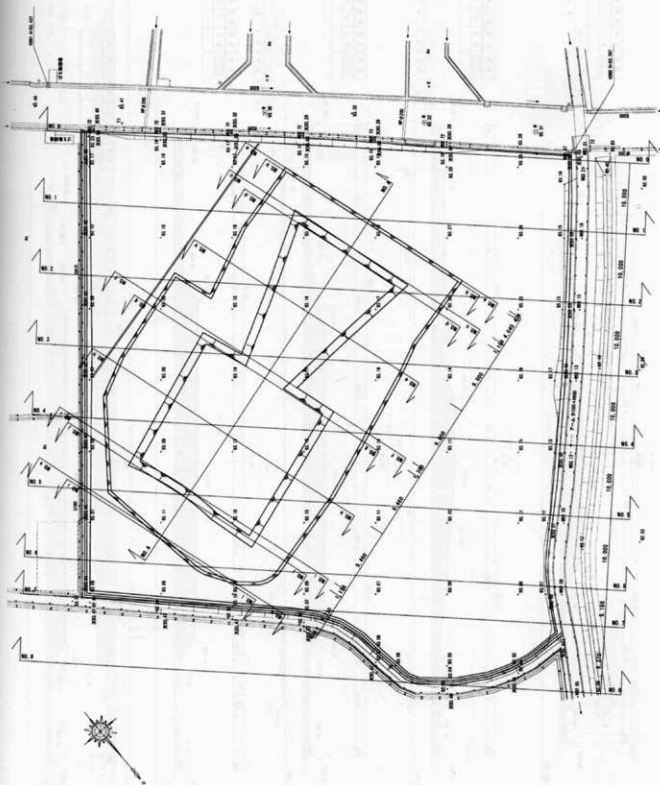


正面断面詳細図

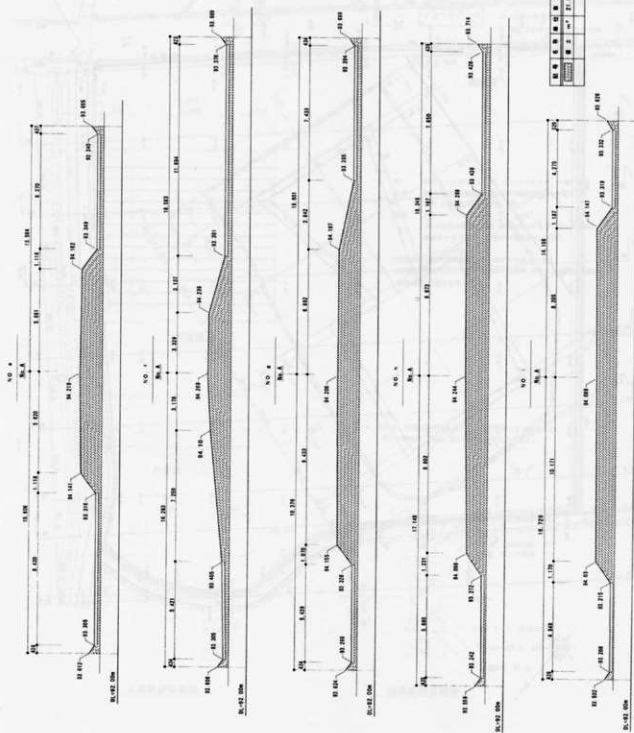


側面断面詳細図

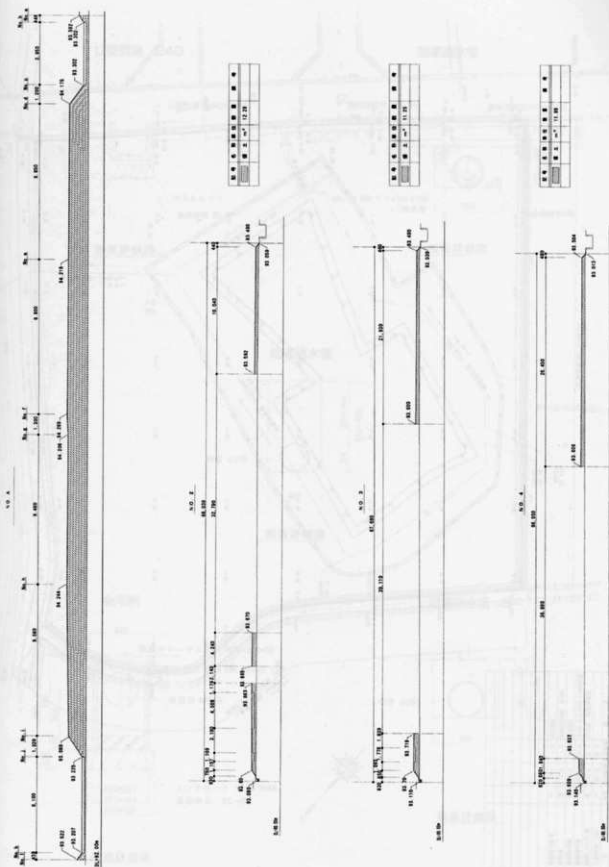
第15図 緑台正面図・側面図・平面図、ベンチ平面図・正面断面詳細図・側面断面詳細図



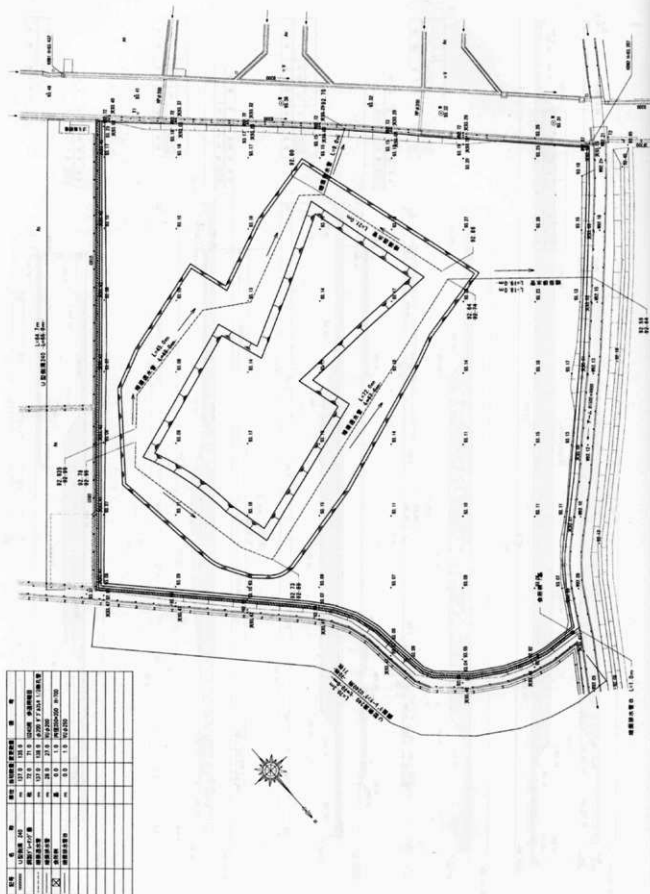
第16図 平成17年度保存整備工事 造成平面図



第17図 填丘造成断面図

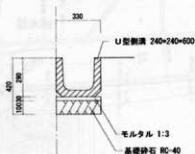


第18图 填丘造成断面图・造成断面图



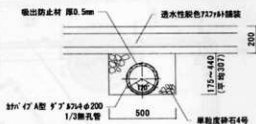
第19図 平成17年度保存整備工事 雨水排水平面図

U型側溝 240



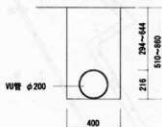
断面詳細図

暗渠透水管



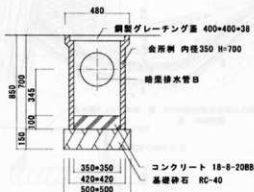
断面詳細図

暗渠排水管



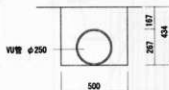
断面詳細図

会所桧



断面詳細図

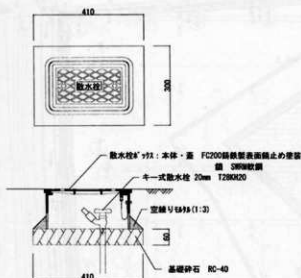
暗渠排水管 B



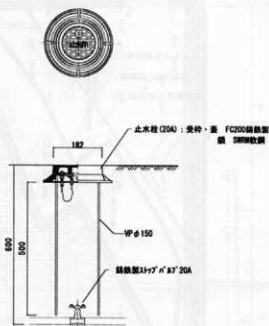
断面詳細図

第20図 U型側溝断面詳細図、暗渠透水管断面詳細図、暗渠排水管断面詳細図、会所桧断面詳細図、暗渠排水管B断面詳細図

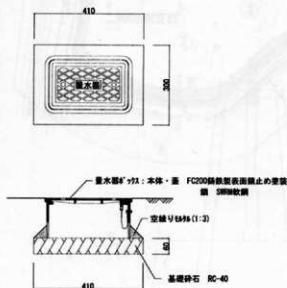
散水栓



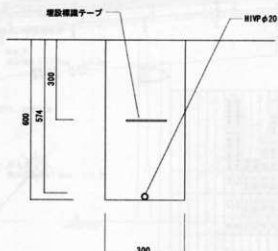
止水栓



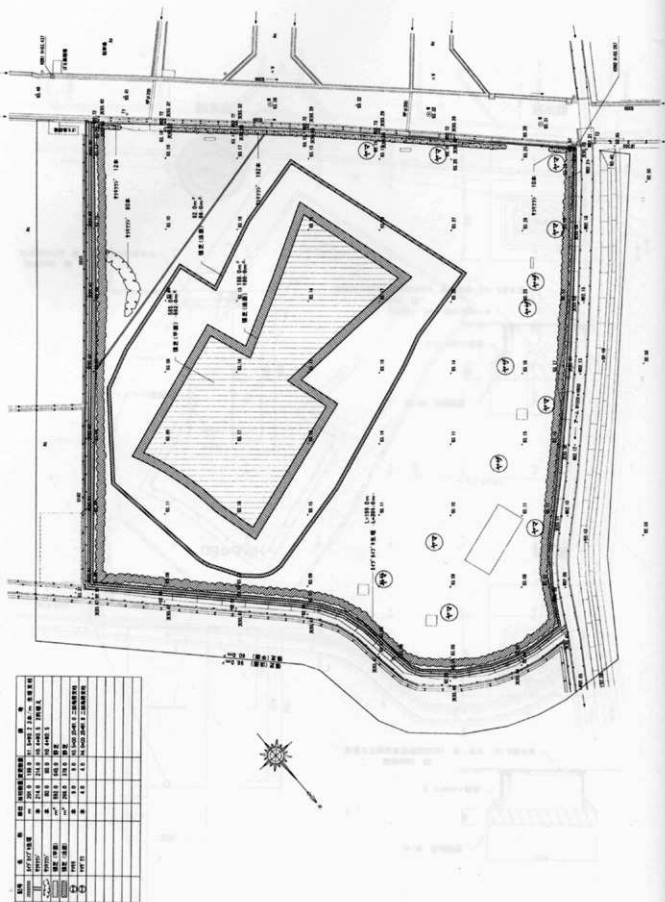
量水器



HIVPφ20



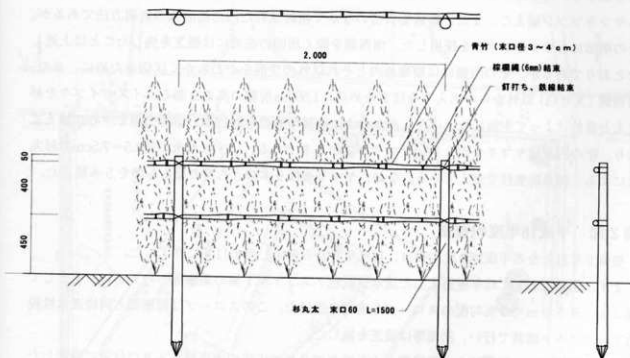
第22図 散水栓、止水栓、量水器、HIVPφ20



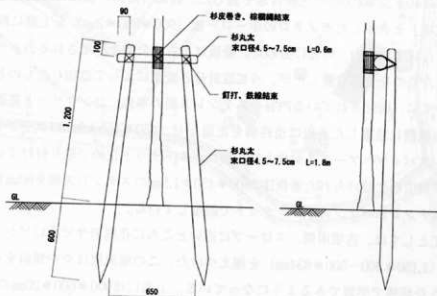
第23図 平成17年度保存整備工事 植栽平面図

生垣支柱

※青竹は、両端部止とする。又、桧欄端束ヶ所については係員指示とする。



二脚鳥居支柱



第24図 生垣支柱、二脚鳥居支柱

植栽工としては、墳丘・周濠法面に加え、南西側（市道側）を除く周囲の法面に張芝を施した。総施工面積は1,000㎡を超える。なお、法面の張芝にはズレを防ぎ、活着を促すよう芝串を用い安定させた。重力式擁壁により法面のない南西側には道路からみて正面になるという景観上のことも加味し、花と緑がありながらも整備地内全体を見渡すうえで妨げとならないよう、低木であるサツキツツジ植えた。また、整備委員会のなかで検討された円形周溝墓の表現方法であるが、その明示にもサツキツツジを採用した。南西側を除く周囲の法面には張芝を施したことは上述したとおりであるが、その内側には整備地内とそれ以外の空間をやわらかく区切るために、また、南西側（入り口）以外からの出入りを防ぐために、1,500mm前後の高さを測るカイズカイクキを杉丸太と青竹によって生垣に仕上げた。高木は4m前後のものを計13本、学習広場を中心に植えており、その内訳はヤマモモが9本、ヤマザクラが4本である。いずれも末口径4.5～7.5cmの杉丸太による二脚鳥居支柱で支えている。なお、ヤマモモは9本のうち実のなるものを5本植えた。

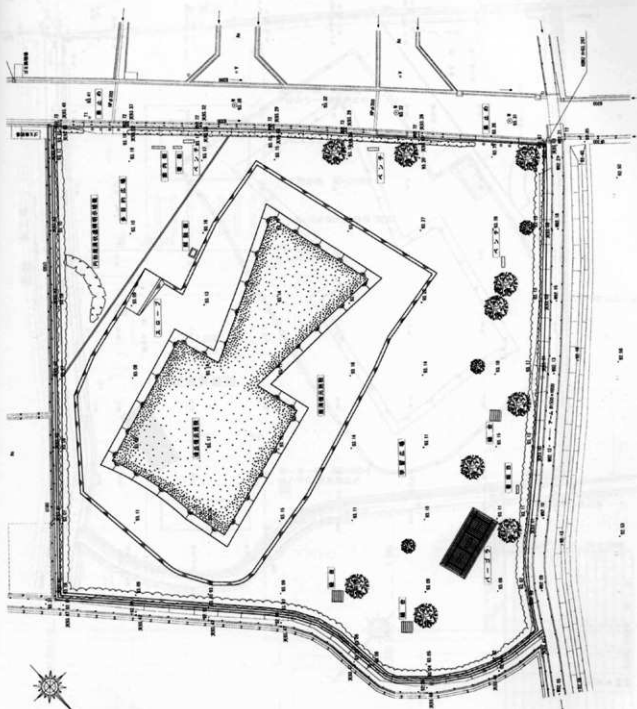
第2節 平成18年度の整備

整備2年目となる平成18年度工事は、18年7月から着手し同年11月に終了した。

まず、園路工として昨年度施工した透水性脱色アスファルト製の周濠部へのアプローチとして幅2m、長さ6mで5%勾配のスロープを南側に設けた。このスロープは周濠部と同様透水性脱色アスファルト舗装で行い、法面等は張芝を施した。

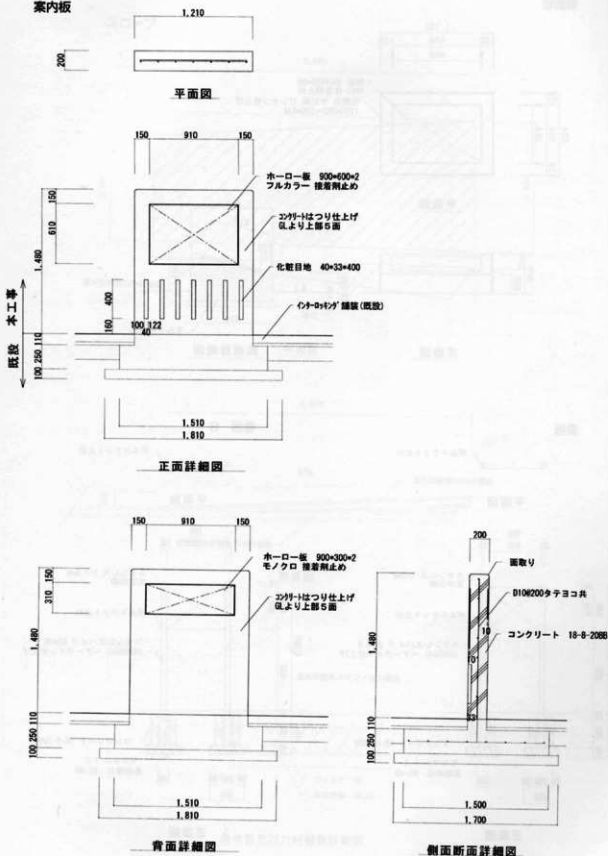
便益施設工では、案内板を1基設置した。昨年度多目的広場の南西側、入り口付近に施工した基礎工事に続いて、上部本体の工事を実施した。案内板本体は1,210*1,480*200mmを測る鉄筋コンクリート製で、地表面以上はすべてはつり仕上げを施した。正面（園内）側には史跡大岩山古墳群の概要と公園の案内表示を記した、900*600*2mmのフルカラーホーロー板を上部に取り付け、その下部は40*33*400mmの化粧目地を施した。裏面（道路）側には「国指定史跡大岩山古墳群 富波古墳」と表示したモノクロのホーロー板（900*300*2mm）を上部に取り付けて、来園者や通行者に対する案内・周知に努めた。看板は当古墳公園を利用される方々への留意・禁止事項を掲載したものを2基設置したが、当初設計分と変更によって追加したものとで一部仕様が変わった。ともに、明記されている内容やステンレス製の本体、コンクリート基礎の仕様は同じである。案内板横に設置した看板は道路側を正面とし、650*450*3mmのステンレス板をΦ48.6mmのステンレスパイプヘアライン仕上げの脚にボルトナット止めで取り付けられている。また、バーゴラ横の学習広場に設けられた看板Bは600*450*1.5mmのステンレス板を50mm角でヘアライン仕上げのステンレスパイプにボルトナットで固定している。

学習施設工としては、古墳南側、スロープに近いところに花崗岩サビ系にビシャン仕上げを施した解説板（1,150*300～500*834mm）を据えつけた。この解説板はやや傾斜を有し、地面に据え置いたような状態で学習できるようになっている。上面には900*600*20mmの大きさをもつ、フルカラー陶板がはめ込まれている。この解説板では、富波古墳の概要と発掘調査時の全景写真、出土土器の一部が紹介されている。



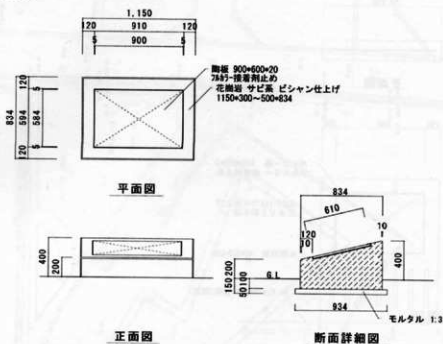
第25図 平成18年度保存整備工事 整備計画平面図

案内板

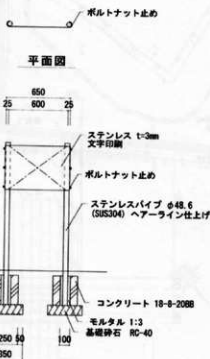


第27図 案内板平面図・正面詳細図・背面詳細図・側面断面詳細図

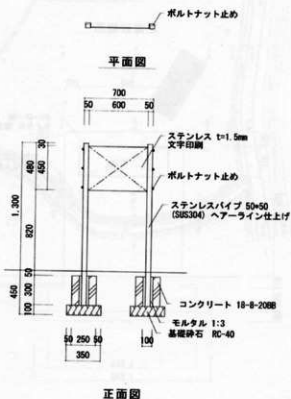
解説板



看板

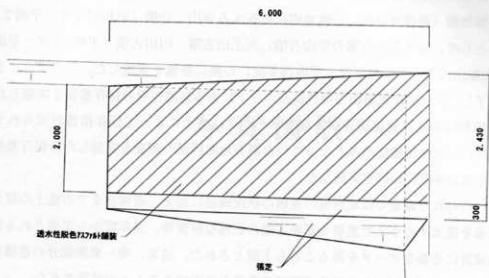


看板 B

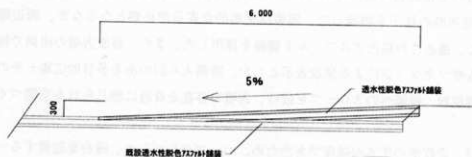


第28図 解説板平面図・正面図・断面詳細図、看板平面図・正面図、看板B平面図・正面図

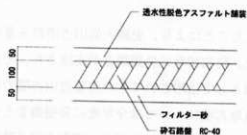
スロープ



平面図



断面図



透水性脱色7X7ft舗装詳細図

第29図 スロープ平面図・断面図・透水性脱色アスファルト舗装詳細図

第3節 保存整備事業総括

史跡大岩山古墳群の保存整備事業は損傷の著しい古墳から整備事業に着手したため、まず、野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）の敷地内に所在する宮山二号墳（昭和63年度～平成2年度）の整備を初めとして、桜生史跡公園の甲山古墳、天王山古墳、円山古墳（平成7年度～平成12年度）、次いで大塚山古墳（平成11年度～平成16年度）の順に整備を実施した。このように5基の保存整備が終了し、次に史跡大岩山古墳群富波エリアにある富波古墳の保存整備を実施した。

富波古墳は昭和57年度に発掘調査が実施されその後は盛土によって保存措置が図られてきたが、平成16年度に一部検出確認のみとなっていた調査地北西部の調査を実施した。保存整備は平成17年度から平成18年度にかけて実施した。

平成16年度に行われた調査では北西部の遺構の状況確認に加え、遺構面までの盛土の厚さや墳丘ならびに周濠を復元するうえで重要な富波古墳の正確な位置等、翌年度から実施される保存整備事業の実施設計に必要なデータを得ることも主眼とされた。結果、南～東側部分の遺構密度に比べて、史跡指定地内の北西～北側部分は遺構の希薄な場所であることが確認された。

保存整備ではこれらの調査データを生かし、発掘調査で検出された墳丘ならびに周濠の復元を整備の主要なものと位置付け進めていった。発掘調査段階で削平されていた墳丘は周辺よりも0.5m盛って築造当時の様子を再現した。周濠は平面的な表示が必要となるなか、周辺環境や管理面を考慮して、透水性の脱色アスファルト舗装を採用した。また、富波古墳の南側で検出された円形周溝墓もサツキツツジによる植栽表示とした。南側入り口のある多目的広場とその周辺には、案内板や解説板、周濠へのスロープを設け、古墳の存在を身近に感じられる空間づくりに努めた。

古墳の北側は一定程度の広さが確保できたため、パーゴラやベンチ、縁台を設置する一方、高木を植えることで、来園者にとってくつろぎのスペースを提供できるようにした。

繰り返しになるが、富波古墳は発掘調査で初めてその存在が明らかとなったために、その墳丘の正確な規模や埋葬施設等については不明である。したがって、残存しない墳丘の復元を行うにあたっては、その方法や度合いについて整備委員会を中心として多くの検討・議論を重ねられた。

今回富波古墳の保存整備を終えたことにより、史跡大岩山古墳群8基のうち残すは亀塚古墳および古富波山古墳の2基となった。昭和49年に発掘調査が実施され、その後盛土によって保存措置が図られ、今日まで地元の公園として活用されてきた古富波山古墳の最終的な整備方法については今後の検討課題であるが、亀塚古墳については今年度に発掘調査と実施設計が行われ、来年度以降保存整備へと進む予定で、近い将来、史跡大岩山古墳群全体の整備完成を目指しているところである。そして、これらの古墳公園のみならず、周辺の古墳や遺跡、銅鐸博物館との複合的な活用が望まれるところである。

写真図版



富波古墳遠景（北西から；写真上、道路をはさんだ向かい側にあるのが亀塚古墳）



富波古墳全景（北西から）



調査地全景（北西から）



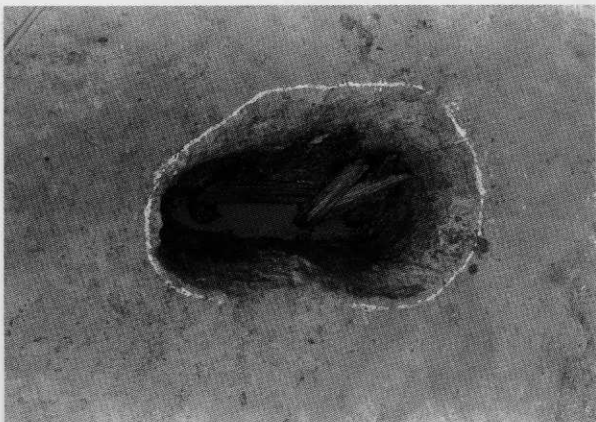
富波古墳全景（西から）



富波古墳前方部先端および周濠西側部分（南から）



円形周溝墓（西から）



周濠南側くびれ部検出土坑 遺物出土状況（南東から）



富波古墳出土土器（番号は遺物図版と対応）



富波古墳整備前全景（西から；平成16年度調査前現況）



富波古墳平成16年度調査 調査区全景（南から）



第1調査区全景（南東から）



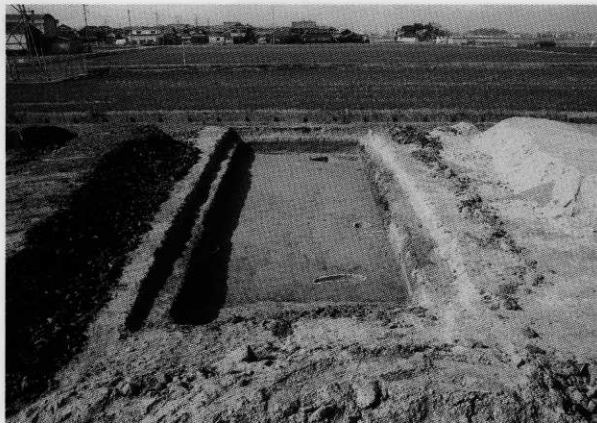
第1調査区全景（北西から）



第1調査区全景（南西から）



第1調査区東隅 富波古墳周濠西隅部検出状況（西から）



第2調査区全景（南東から）



第2調査区全景（北西から）



第3調査区全景（南東から）



第3調査区全景（北西から）



平成17年度保存整備工事 全景（西から）



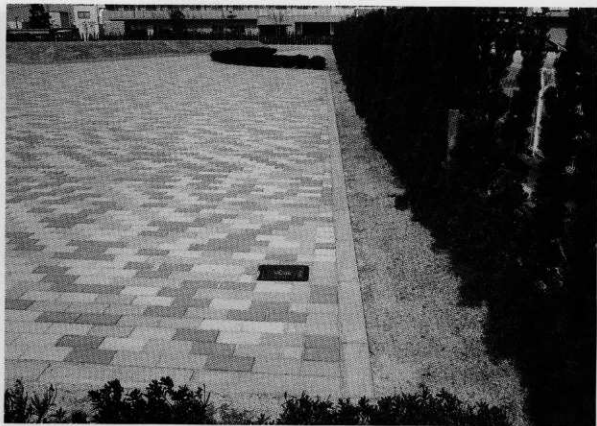
平成17年度保存整備工事 全景（南から）



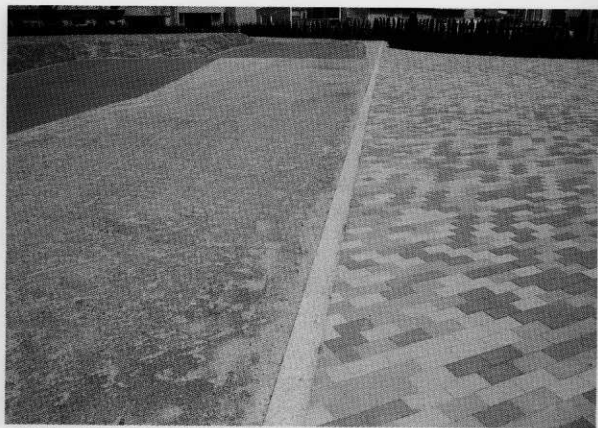
平成17年度保存整備工事 富波古墳復元



平成17年度保存整備工事 透水性脱色アスファルト舗装・張芝



平成17年度保存整備工事 地先境界ブロック・散水栓



平成17年度保存整備工事 切石緑石



平成17年度保存整備工事 多目的広場インターロッキング舗装・車止め



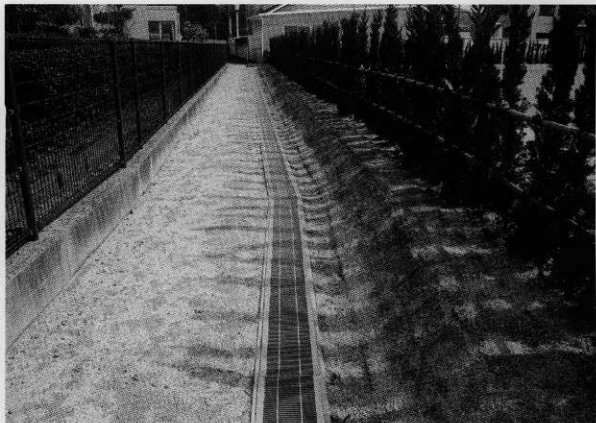
平成17年度保存整備工事 土留擁壁・サツキツツジ植栽・ベンチ



平成17年度保存整備工事 パーゴラ・ベンチ・インターロッキング舗装



平成17年度保存整備工事 緑台



平成17年度保存整備工事 U型側溝・グレーチング蓋・張芝・カイズカイブキ生垣



平成17年度保存整備工事 植栽（ヤマモモ・ヤマザクラ）



平成18年度保存整備工事 全景（南東から）



平成18年度保存整備工事 案内板



平成18年度保存整備工事 解説板



平成18年度保存整備工事 案内板（裏側）・看板



平成18年度保存整備工事 看板B



平成18年度保存整備工事 スロープ

報告書抄録

書名	史跡大岩山古墳群 富波古墳調査整備報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	角 建一							
編集機関	野洲市教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒520-2492 滋賀県野洲市西河原2400番地 電話 077-589-6436							
発行年月日	2008年1月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "	着手/完了		
富波古墳	野洲市富波字 亀塚甲1448番の1 他2筆	25343	048	35 04 49	136 01 54	2005.2.4 2005.2.22	245m ²	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富波古墳	古墳	古墳時代前期	前方後方墳	土師器・須恵器	なし

史跡大岩山古墳群 富波古墳調査整備報告書

2008年1月

発行 野洲市教育委員会

〒520-2492

滋賀県野洲市西河原2400番地

編集 野洲市教育委員会 文化財保護課

印刷 大津紙業写真印刷株式会社